

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第10集

# 上野原小学校遺跡Ⅱ

町立上野原小学校給食施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

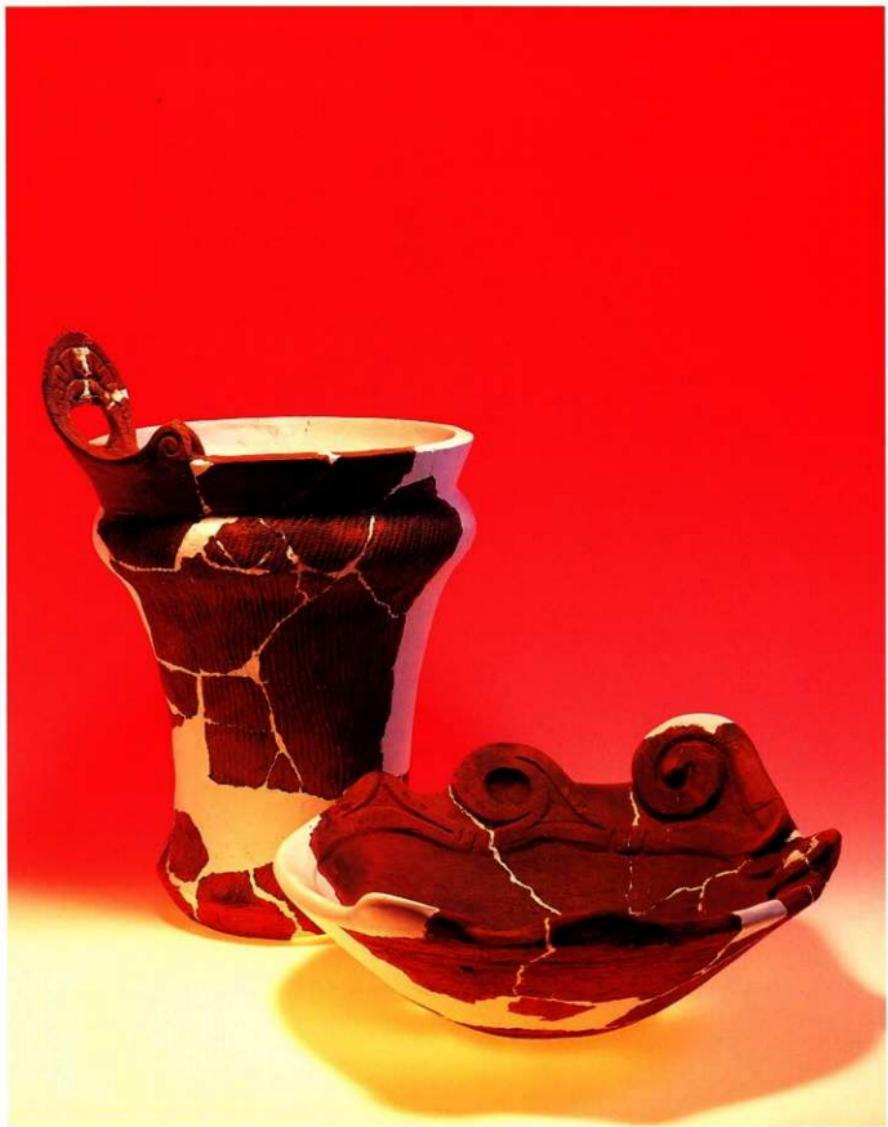
上野原町教育委員会

# 上野原小学校遺跡Ⅱ

町立上野原小学校給食施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

上野原町教育委員会



1 遺跡出土の縄文土器



2 遺跡付近から丹沢連峰を望む



3 2号住居址

# 序

本書は、平成8年、上野原小学校給食調理場の建設に伴って実施した上野原小学校遺跡の発掘調査報告書です。

上野原町内では原始・古代の遺跡が100ヶ所以上で確認されており、悠久の歴史を物語る埋蔵文化財の調査・保護は重要な課題です。このたびの発掘調査は、学校教育上重要かつ緊急を要する事業である給食調理場建設のため、遺跡の記録保存を目的に実施したものです。調査の結果、縄文時代の土器や石器、奈良時代始め頃の竪穴住居跡などが発見され、予想外の多大な成果をあげることができました。とくに、住居跡には相模型（今の神奈川県）の甕や小さな粟粒が残されていた事が分かり、当時の生活を知る重要な手がかりが得られました。本書が多くの方々に活用され、埋蔵文化財や郷土史の理解が深まるることを願ってやみません。結びにあたり、遺跡発掘調査にご協力いただいた関係各位、発掘現場で元気な声援をかけてくれた児童諸君、そして本書刊行にあたられた関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

上野原町教育委員会

教育長 水越偉成

## 例 言

1. 本書は、山梨県北都留郡上野原町上野原字上宿、<sup>うえのほら</sup>上野原小学校遺跡の第Ⅱ次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、町立上野原小学校給食施設建設に伴う事前調査として平成8年度に実施された。
3. 発掘調査は上野原町教育委員会が実施した。現場調査時の組織はつぎのとおりである。
- 事務局 教育長 遠藤謙三  
社会教育課長 久島 啓  
社会教育係長 片伊木卓男  
担当者 社会教育係 小西直樹  
参加者 安藤猛夫、長田貞夫、富田 寛、出羽和夫、多葉田孝一、加藤文宣、杉本征男、柴地文博、上條笑子、小俣文子、小俣時代、古根村典子、片伊木まち子、片伊木由香、新福百合子、富山啓子、杉本良江
4. 出土品の自然化学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果は付篇に示した。
5. 本書の執筆・編集は、小西が行った。
6. 発掘調査から本書の作成までを通して、つぎの方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。奈良泰史（都留市役所）、杉本正文（大月市教育委員会）、森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、田尾誠敏（東海大学）、安藤隆 敬称略・順不同
7. 本書にかかる出土品・記録図面等は、一括して上野原町教育委員会が保管している。

## 凡 例

### 1. 遺構図版

- (1) 遺構の縮尺は1/60を基本としたが、カマドは1/30である。
- (2) 遺構図の「240m」といった数値は、標高を示す。
- (3) 遺構図の網掛け（スクリーントーン）は、とくに指示のないものは焼土を示す。
- (4) 遺構図の遺物分布については、平面分布を全点表示し、垂直分布は幅を区切って表示した。
- (5) 遺構図の遺物分布における記号の意味はつぎのとおり。

●土師器・須恵器 ○環 ▲縄文時代の遺物（土器・石器）

### 2. 遺物図版

- (1) 遺物の縮尺はつぎのとおりである。  
縄文土器（大型）・古代の土器1/4。縄文土器（破片）・石器1/3。小型石器2/3。土製円盤1/2。
- (2) 土器の実測図には4分割の方法を用い、左半面に外面、右半面に内面および土器の断面形を表わした。  
また、中軸線が一点傾線の場合は、180°回転させて復元実測したことを示している。
- (3) 土器の実測図の矢印は、器面の砂粒の移動方向を示し、これにより整形時の工具の使用方向を推定した。

### 3. 表

- (1) 石器の法量のうち、長さ・幅については実測図の縦・横で計測したが、横刃形石器・石匙のみ実測図の縦を幅、横を長さとして計測した。いずれも最大値を示している。
- (2) 表中の法量で（ ）内の数値は、推定値を示す。
- (3) 色調の判別には、「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修 1988）を利用した。

## 目 次

序

例 言

凡 例

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境.....	1
第1節 遺跡の位置.....	1
第2節 周辺の遺跡.....	2
第Ⅱ章 遺跡の研究略史.....	3
第Ⅲ章 調査の経緯.....	5
第1節 調査にいたる経緯と経過.....	5
第2節 調査の方法.....	5
第3節 遺跡の層序.....	6
第Ⅳ章 調査の成果.....	8
第1節 縄文時代.....	8
(1) 土器集中部.....	8
(2) 土器.....	10
(3) 土製品.....	25
(4) 石器.....	26
第2節 古代（古墳時代末～奈良時代）.....	36
(1) 墓穴住居址.....	36
(2) 上坑.....	52
(3) 遺構外出土遺物.....	52
第Ⅴ章 まとめ.....	53
付篇 1 上野原小学校遺跡における自然科学分析.....	55
付篇 2 上野原小学校出土の縄文式土器.....	58

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	周辺の遺跡分布	2
第3図	調査区の位置	4
第4図	遺跡の層序	6
第5図	全体図	7
第6図	土器集中部	8
第7図	縄文土器の重量分布図	9
第8図	土器(第I・II・III群)	15
第9図	土器(第III群)	16
第10図	土器(第III群)	17
第11図	土器(第III群)	18
第12図	土器(第III群)	19
第13図	土器(第III群)	20
第14図	土器(第III群)	21
第15図	土器(第IV群)	22
第16図	土器(第IV群)	23
第17図	土器(第IV~Ⅵ群)	24
第18図	土製円盤	25
第19図	石器(打製石斧)	27
第20図	石器(打製石斧)	28
第21図	石器(打製石斧)	29
第22図	石器(打製石斧・礫器)	30
第23図	石器(打製石斧・石匙・横刃形石器)	31
第24図	石器(磨石類・石皿・磨製石斧)	32
第25図	石器(磨製石斧・石錐)	33
第26図	石器(石鐵・加工痕のある剥片・石錐)	33
第27図	1号住居址	37
第28図	1号住居址カマド	38
第29図	1号住居址遺物分布図・出土遺物	39
第30図	2号住居址・土坑	42
第31図	2号住居址カマド	43
第32図	2号住居址遺物分布図・砾接合状況	44
第33図	2号住居址出土遺物	45
第34図	3号住居址・遺物分布図	47
第35図	3号住居址カマド	48
第36図	3号住居址カマド石被覆状況	49
第37図	3号住居址出土遺物	50
第38図	土坑	52

第39図	遺構外出土遺物	52
第40図	縄文土器の分布図	54
第41図	注口土器	58

## 表目次

第1表	土製円盤一覧表	25
第2表	石器一覧表(1)	34
第3表	石器一覧表(2)	35
第4表	1号住居址出土遺物一覧表	40
第5表	2号住居址出土遺物一覧表	46
第6表	3号住居址出土遺物一覧表	51

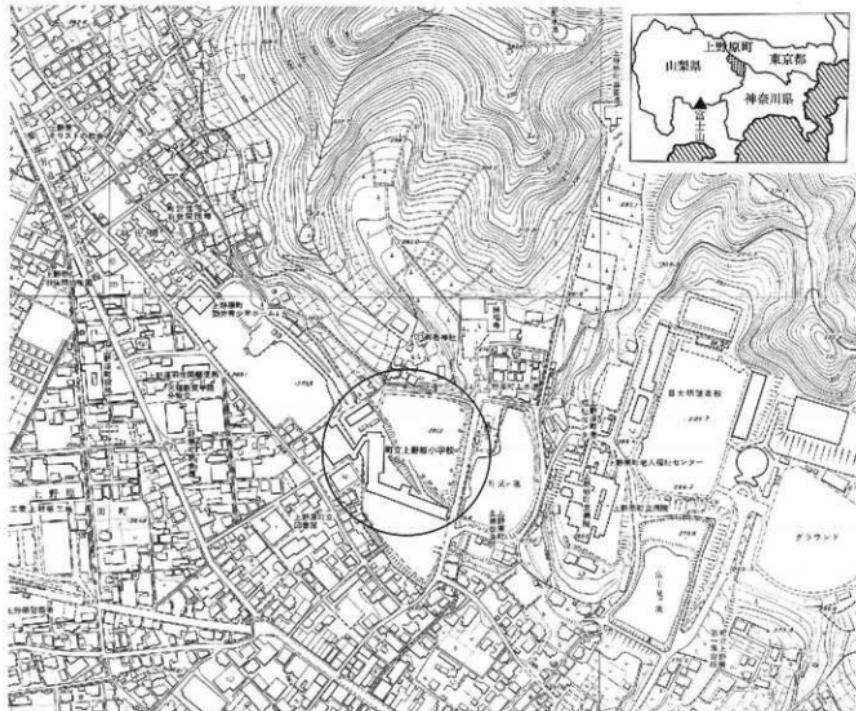
## 写真図版目次

巻頭図版1	遺跡出土の縄文土器
巻頭図版2	遺跡付近から丹沢連峰を望む
巻頭図版3	2号住居址
図版1	調査前全景・試掘調査状況
図版2	調査区上層断面・住居址検出状況
図版3	1号住居址・カマド
図版4	1号住居址土坑B・遺物出土状況
図版5	2号住居址・カマド検出状況
図版6	2号住居址カマド煙道部・遺物出土状況
図版7	3号住居址・カマド
図版8	3号住居址カマド煙道部・遺物出土状況
図版9	1号土坑、2号土坑
図版10	3号土坑、4号土坑
図版11	土器集中部A
図版12	土器集中部B・出土土器
図版13	出土上器
図版14	出土土器
図版15	出土土器
図版16	出土土器・土製品
図版17	出土石器
図版18	出土石器
図版19	1号・2号住居址出土遺物
図版20	2号・3号住居址出土遺物
図版21	3号住居址・遺構外出土遺物・注口土器
図版22	調査風景

# 第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

## 第1節 遺跡の位置

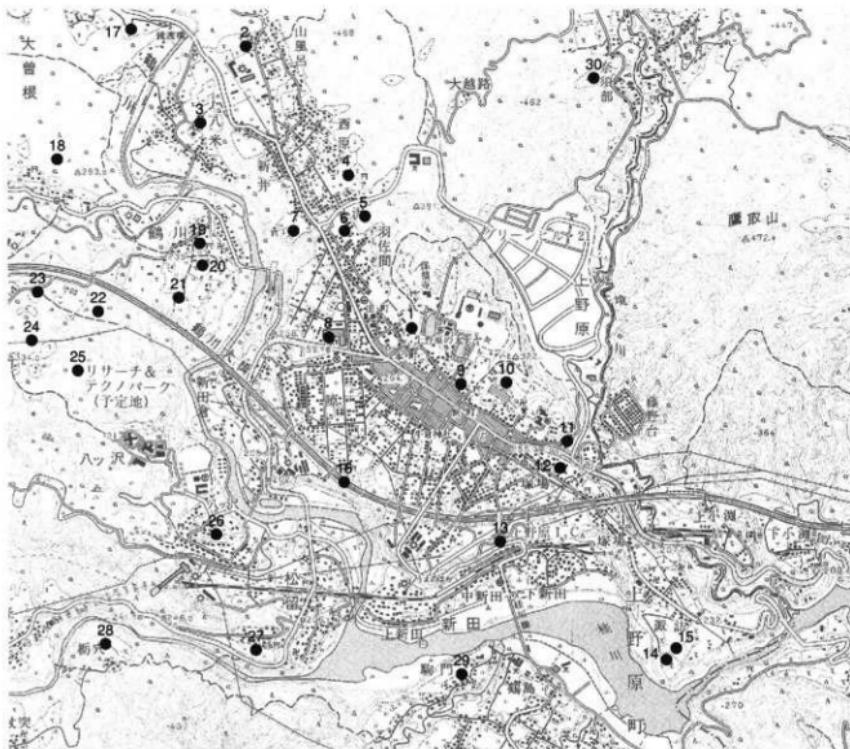
上野原小学校遺跡は、山梨県北都留郡上野原町上野原地区に位置する。上野原町は山梨県東端の県境に位置し、東京都檜原村や神奈川県津久井郡に接している。周囲は関東山地や丹沢山塊に囲まれ、桂川（相模川）・鶴川・仲間川の沿岸に狭小な河岸段丘地形が点在している。桂川と鶴川の合流地点に現在の市街地が広がる町内最大の段丘面があり、本遺跡はこの背後の丘陵地西端に位置する。遺跡付近の地形は現在大きく変わっているが、旧状では丘陵から派生した支脈の先端部にあたり、遺跡の範囲は、現在の御岳神社がある尾根の頂部付近から上野原小学校の敷地を含めた南斜面一帯に広がっていたものと推定されている。遺跡東側の月見ヶ池（昭和初期の人工池）から保福寺の一带は谷地形で湧水が見られる。丘陵上からの眺望は良く、市街地を見渡せ、正面には丹沢山塊や富士山の頂を見ることができる。



第1図 遺跡の位置 (1/5000)

## 第2節 周辺の遺跡

上野原小学校遺跡の位置する段丘上では背後の丘陵端部に多数の遺跡が確認され、このうち大堀II遺跡（5）は縄文時代中期の竪穴住居址2軒、大堀I遺跡（6）では平安時代の竪穴住居址2軒が発掘調査された。一方、段丘平坦面の遺跡分布は比較的希薄だったが、近年の調査で新井遺跡（7）や大間々遺跡（8）で平安時代の竪穴住居址などの遺構が多数発見され、古代の集落址が段丘一帯に広がる様相が明らかとなってきている。



- 1 上野原小学校 縄文（早・中・後）、古墳、奈良、平安
- 2 山風呂 縄文（前）
- 3 八米 縄文（中）
- 4 西ノ原 縄文（早・前）
- 5 大堀I 縄文（中）、平安
- 6 大堀II 縄文（早・中）、古墳、平安
- 7 新井 縄文（早・中）、平安
- 8 大間々 平安
- 9 新町 繩文（中）
- 10 楠木山 縄文（中・後）、平安
- 11 桜ヶ丘 縄文、古墳、平安
- 12 塙場古墳群 古墳
- 13 開山 縄文（早・中）、平安
- 14 狐原I 縄文（早～後）、弥生、古墳、奈良、平安
- 15 狐原II 縄文（早～後）、弥生、古墳、奈良、平安
- 16 内城館社 中世
- 17 小金 縄文（早・前）
- 18 大曾根 縄文（前・中）
- 19 上野山I 縄文（後）
- 20 上野山古墳 古墳
- 21 上野山II 縄文（中・後）、弥生
- 22 大浜 縄文（早・中・後）、平安
- 23 南大浜 縄文（中）
- 24 大門I 縄文（早・中・後）、平安
- 25 大門II 縄文（早・中）、平安
- 26 ハツ沢 縄文（中）
- 27 松留 縄文（後）
- 28 棚穴 縄文（中）
- 29 駒門 縄文（中）、弥生
- 30 奈須部 縄文（早・中）、古墳、平安

第2図 周辺の遺跡分布 (1/25000)

## 第Ⅱ章 遺跡の研究略史

上野原小学校は明治9年（1876）に校舎本館が完工され、敷地は南面の傾斜地を大きく切り盛りして造成された<sup>(1)</sup>。現在の敷地は、グランドがある上段、校舎本館や大ケヤキがある中段、屋内運動場がある下段の大きく3段に分けられる。これまでの調査経緯はつぎのとおりである（第3図）。

①昭和初期の調査 昭和3年（1928）、学校敷地工事で多数の遺物が出土した際、仁科義男氏が「数回の調査の機会を得て」遺物の収集を行った。これが遺跡発見の端緒となり、翌年には山梨県史跡名勝天然記念物調査委員会において先史遺跡に指定されている。調査の成果は仁科氏により報告され<sup>(2)</sup>、以降の研究は概ねこれが基礎となってきた。当時の報告によれば、調査の場所は不明だが、遺跡を上野原遺跡と呼称し、その範囲を御岳神社境内から小学校敷地にわたる一帯とした。遺構は未発見だが「縄文式、弥生式、祝部式」の土器や石棒などの石器が出土し、とくに縄文土器が多くを占める。中には中期曾利式の深鉢形上器や、後期堀之内式の「耳附注口土器」<sup>(3)</sup>など完形に近い土器がある。現在、これら遺物の大半が失われてしまった。この後、本遺跡は、昭和37年（1962）と昭和47年（1972）に行われた町内の遺跡分布調査で登録され、昭和47年の遺跡台帳で上野原小学校遺跡の名称が付けられた。

②第Ⅰ次調査 昭和63年（1988）から翌年にかけ、学校施設の大規模な改良・建設工事の際に上野原町教育委員会が行った一連の調査である。昭和63年3月、屋内運動場建設工事に伴う試掘調査では、遺構は認められず、学校造成の搬入上から縄文土器や石器、土師器・須恵器の破片が擾乱状態で出土した。本格調査には至っていない。翌年10月、隣接の甲府地方法務局上野原出張所の跡地で水泳プール建設工事に伴う試掘調査が行われ、遺構は認められず、旧表土中から縄文中期の土器、土師器・須恵器・灰釉陶器の破片が混在して出土した。本格調査には至っていない。この調査と平行して、講堂跡地の150m<sup>2</sup>で校舎増築工事に伴う初めての本格調査が行われ、遺構は認められなかったが、斜面地から縄文土器や打製石斧などの石器が多量に出土した。遺物は縄文中期が主体で、頬面把手や動物意匠文の土器、上側や土笛状の土製品も含まれる。

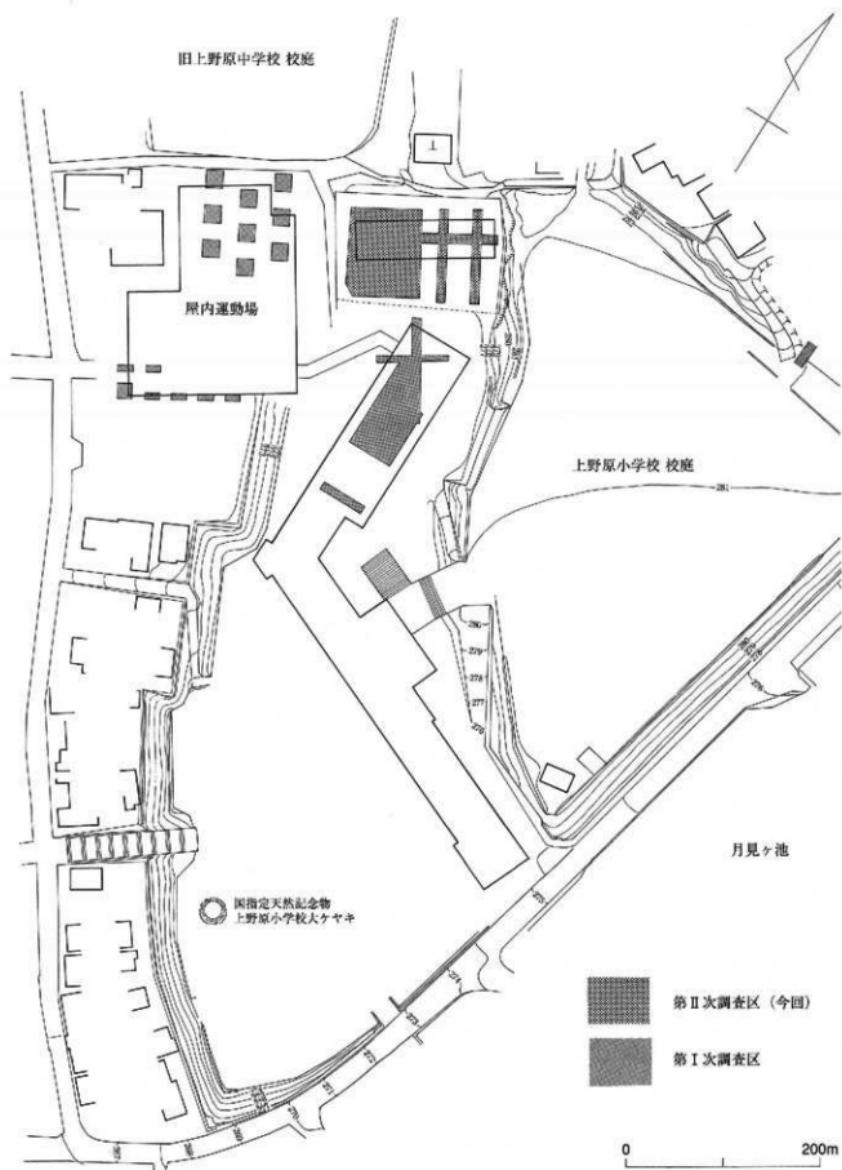
### ③第Ⅱ次調査 平成8年（1996）、今回報告の本格調査。

上野原小学校遺跡は縄文時代中期・後期に該当するとされていたが、これまでの調査は断片的で遺構も未確認だったことから、具体的な内容はよく不明なままであった。この意味で、今回の第Ⅱ次調査で古墳時代から奈良時代の堅穴住居址が検出された意義は大きい。また、遺跡の大半は明治以降の造成工事で破壊されてしまったものと思われていたが、昭和40年代に校舎裏の上手から縄文後期堀之内式の注口土器が掘り出された事があり（付篇2）、さらに近年の調査では敷地の中段や下段において工事による掘削が地下の遺跡まで及んでいない箇所が確認されていることから、遺跡が残されている可能性は強い。

註（1）当時、敷地の造成に際して傾斜地に大規模な盛り土をしたため、敷地南側にある国指定天然記念物「上野原小学校の大ケヤキ」（昭和19年指定・樹高28m）の主幹は、5mほど埋められたと伝えられている。

（2）「柱川沿岸先史民族の遺跡（上）」「科学画報」1930、「甲斐の先史並原史時代の調査」「甲斐志料集成12」1935、「上野原町誌」1955

（3）この注口土器は、仁科氏の報文によると当時の東京・帝室博物館に陳列されたとされ、現在の東京国立博物館にある上野原町上宿遺跡出土と伝わる注口土器と酷似する。上宿遺跡の名称は上野原小学校遺跡の旧称と考えられることから、両者は同一の土器と見られる。この土器を近年、山梨県史編纂室で調査している（長沢宏昌「山梨県内出土の注口土器について」『山梨県史研究 第5号』1997）。



第3図 調査区の位置

## 第Ⅲ章 調査の経緯

### 第1節 調査にいたる経緯と経過

調査地は上野原町上野原字上宿3489番地で、上野原警察署署員宿舎（鉄筋コンクリート3階建）跡地である。ここに、隣接する上野原小学校の給食施設が建設されることになったため、遺跡調査を行うことになった。

試掘調査は、宿舎撤去後の平成8年（1996）4月15日～17日までを行い、幅1.5mの試掘溝4本を重機によって掘削した。この結果、調査地は、南斜面を近代以降の土木工事によって地山のローム層まで大きく削平し、最厚2mの盛り土で平坦に造成した場所であることが分かった。これにより遺跡の存在は薄いものと思われたが、工事による掘削が及ばなかった旧斜面地の下方では、古代の堅穴住居址や土坑、さらに縄文時代の遺物包含層が確認された。この結果を踏まえて本調査の一部実施が必要と判断され、その範囲は工事予定区域1,000m<sup>2</sup>のうち約200m<sup>2</sup>に絞られた。本調査は平成8年4月22日～6月4日まで、つぎの経過で行った。

4月 重機によって盛り土を掘削し、古代の遺構確認面（第Ⅲ層上面）、ないしはその直上層（第Ⅱ-1層上面）を検出したが、第Ⅱ-1層が残る範囲は以下人力で掘り下げ、第Ⅲ層上面における遺構確認に努めた。この結果、試掘時に見つかった遺構を含め古代の堅穴住居址3軒と円形土坑4基を確認した。25日から各遺構の検出を開始した。

5月 8日以降、遺構が検出されなかつた範囲を人力で掘り下げ、縄文時代の土器片や石器を多量に含む第Ⅲ層を調査した。遺物の取り上げ後、最終的に地山のローム層上面まで掘り下げた。一方、調査区南側の拡張を行い、未調査範囲に一部かかっていた堅穴住居址2軒（1号・3号）を完全に検出することを期待したが、隣接する学校通学路の安全を考慮して、住居の一部は未調査のままとなつた。現場調査は6月4口までに終了した。なお、5月19日に小学生と地元住民を対象に遺跡見学会を行つてゐる。

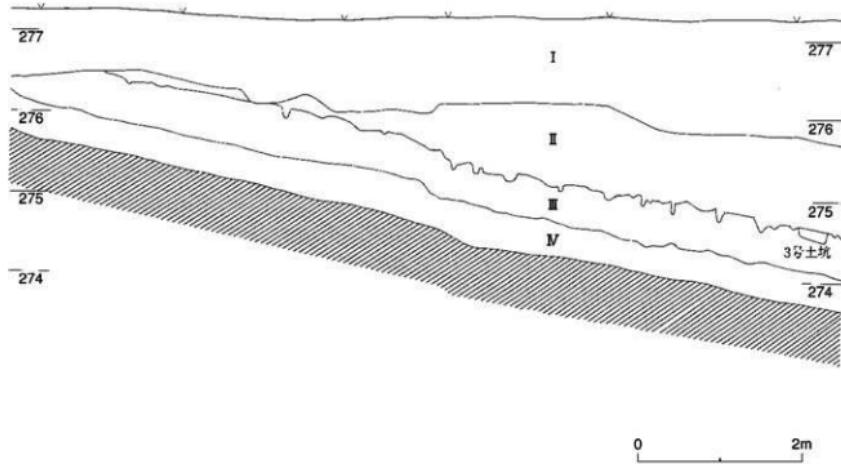
### 第2節 調査の方法

調査区全域に5m方眼の区画（グリッド）を設定した。調査は、表土を重機で掘削した後、遺構・遺物を確認しながらすべて人力で掘り下げた。遺物は原則として出土位置の平面・標高を計測して取り上げたが、縄文遺物の調査では、遺物集中部を除き5m区画の単位で取り上げている。掘り下げは基本的にローム層上面までとした。堅穴住居址の調査は、基本的に土層観察用の土手を十字に残して掘り下げた。カマド内や周辺の土壤はサンプルとして採取し、後日、炭化種子等の選別作業を行つた。この作業はフローテーション法に従い、室内で自然乾燥させた土壤を、水を張ったバケツに入れて静かに攪拌し、浮遊してくる炭化物等を採取した。この作業を同じ土で2度繰り返し、採取した炭化物から微細な種子を選別した。種子の同定は民間の調査機関に委託している。

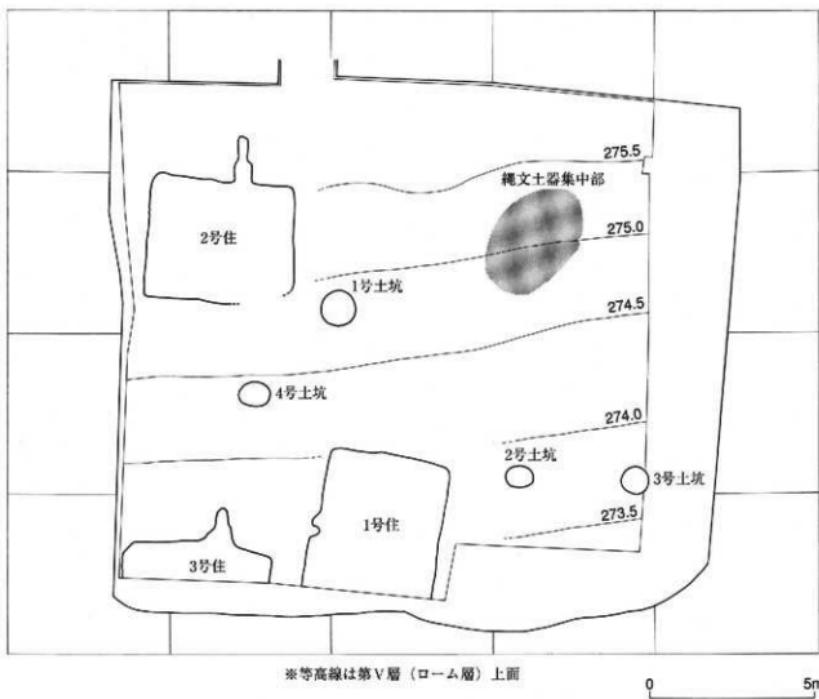
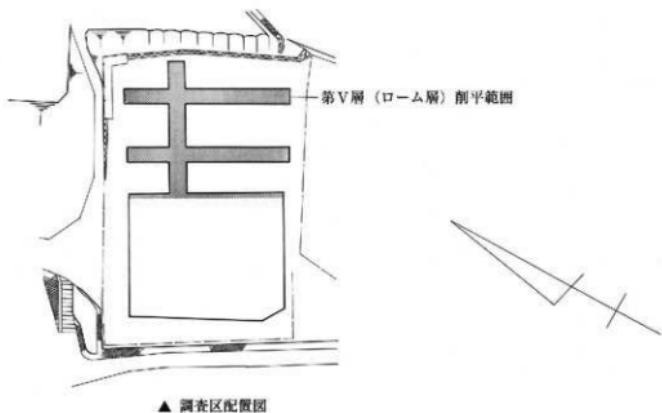
### 第3節 遺跡の層序

基本的な層序はつぎのとおりで、第Ⅰ次調査（1993）で確認された上層と同じである。概ね6層のうち第Ⅰ～第Ⅱ層が近代以降の人為的な盛り土であり、第Ⅲ層以下が旧状を留めた層である。第Ⅲ層以下は全体に南方に向かって傾斜し、各層厚はほぼ一定している。

- 第Ⅰ層 警察宿舎造成時の盛り土で、ハードローム塊を主体にコンクリート塊や砂利を含む整地層である。
- 第Ⅱ層 暗褐色土 近・現代の盛り土。締まり・粘性とも弱い。
- 第Ⅱ-1層 黒褐色土 締まり・粘性とも弱い。斜面下方の一部で確認された。色調や黑色スコリアを含む点は古代遺構の覆土に類似するが、第Ⅱ層に由来する暗褐色土塊（10cm以下）を含む。本層は本来、造構覆土の基調となった自然堆積層が、斜面地形による自然流出や近・現代以降の造成工事による搅拌が加わって生成されたものと考えられる。
- 第Ⅲ層 褐色土 締まりやや強く、粘性弱い。橙色スコリア（1～5mm大）、炭化粒（3mm以下）を多く含む。縄文時代早期から後期の遺物包含層で、本層上面が古代の遺構確認面である。
- 第Ⅳ層 黒褐色土 締まり、粘性ともやや強い。橙色スコリア（1～5mm大）、炭化粒（3mm以下）を多く含む。縄文時代の遺物をわずかに含むが、第Ⅲ層との間に遺物の時期差は認められない。
- 第Ⅴ層 橙褐色土 ローム層に相当する。旧斜面地の上方は近代以降の土木工事で大きく掘削されているため、第Ⅰ層を除去すると本層中のハードロームが露出する状況であった。



第4図 遺跡の層序 (1/60)



第5図 全体図

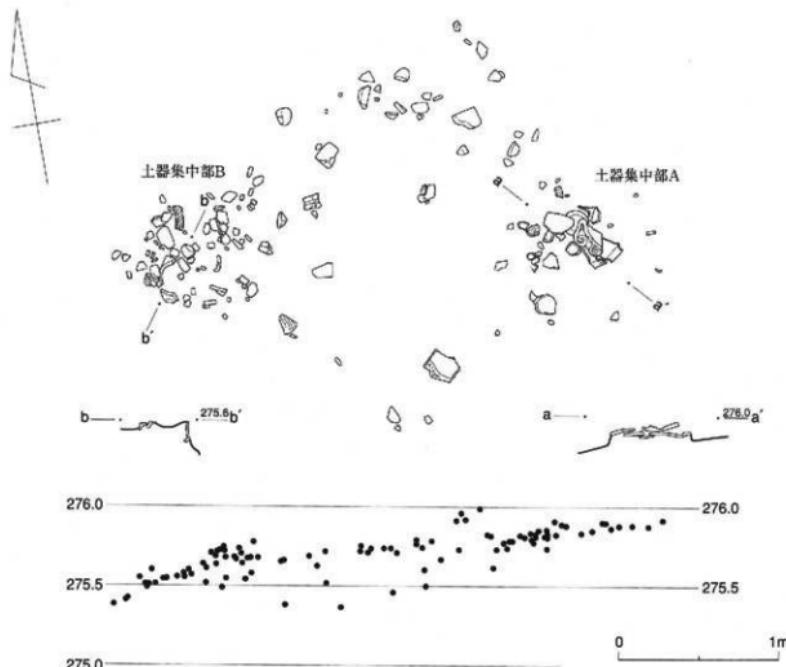
## 第IV章 調査の成果

### 第1節 縄文時代

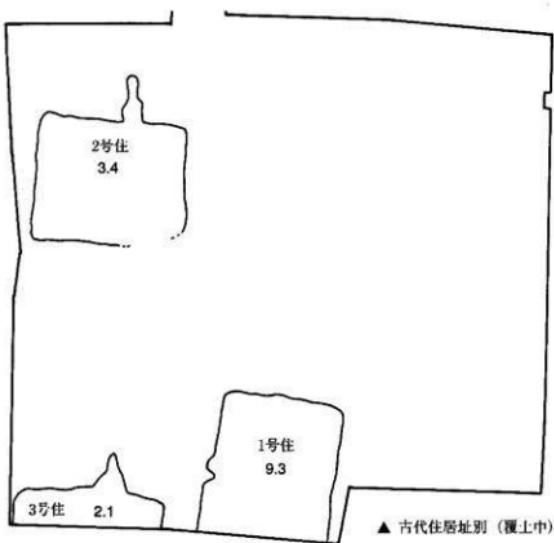
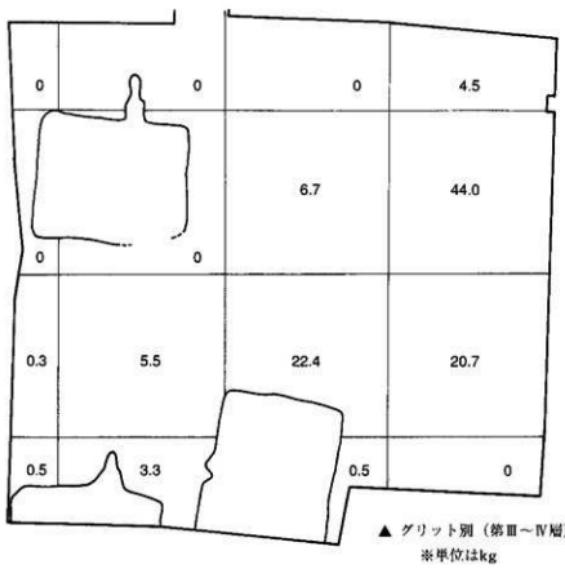
遺構はなかったが、多数の土器・石器が広範囲に出土した。遺物は第III層を中心に第IV層中にかけて出土し、一部に上器集中部が認められた。古代の竪穴住居址の覆土にも多く流入している。遺物の時期は早期末から後期中葉にわたるが、主体は中期である。層位による時期差は認められない。以上の出土状況は、隣接の調査地区（1993）でも同様に確認されており、遺物の分布範囲が斜面地を帯状に取り巻いている状況が推定できる。

#### (1) 土器集中部

A-1区の第III層中で2箇所（A・B）認められた（図版11・12）。両者の間隔は約1.4mである。Aは約80cm四方の範囲にまとまり、大型の土器破片が含まれる。大型の破片は2個体で、内面を上にした深鉢（第12図57）に浅鉢（第12図58）が重なって出土した。Bは約1m×90cmの範囲にまとまり、大型の土器破片が含まれる。大型の破片は1個体で、口縁から胴上半部にかけて残る深鉢（第16図123）が倒立状態で出土した。A・Bともに掘り方は認められなかった。土器は、Aが第III群（中期中葉）、Bが第IV群（中期後葉）にあたる。



第6図 土器集中部 (1/30)



第7図 繩文土器の重量分布図

## (2) 土器

土器破片の総数約6400点、総重量153kgが出土した。このうち7割が第Ⅲ層～Ⅳ層の出上で、1割が古代堅穴住居内の混入、他は第Ⅱ層（IH表土）出土である。なお、焼成不良で生焼けのような土器片が約20点出土している。いずれも質感は粉っぽく、器面は摩滅している。色調はむらがあり、橙色や灰色を呈する。これらの土器は他と混在して出土し、特異な出土状況は見られない。文様の不鮮明なものが多いが、概して第Ⅲ群・Ⅳ群（中期中葉・後葉）に比定できると思われる。本項では1点のみ図示した（第Ⅲ群第2類136）。

本書では157点の土器を報告し、以下のとおり分類した。

### 第Ⅰ群 繩文早期の土器（第8図1、図版13）。

鶴ヶ島台式土器（1）が出土した。微隆起線による区画に押引文と円形竹管文が伴う。

### 第Ⅱ群 中期前葉の土器（第8図2～4、図版13）。

角押文が多用される。2、口縁部に円形竹管文を施した隆帯を付け、区画内に角押文が充填される。3、口縁部に2段の三角状の斜行文が連続し、上段は2条の角押文、下段は沈線で施される。4、隆帯に沿って2条の角押文が施される。これらの土器は猪沢式期に比定される。

### 第Ⅲ群 中期中葉の土器（第8図5～13図、図版12～15）。

#### 第1類 藤内式期に比定される。

a種 沈線による波状文とキャタピラ文が施された各種の深鉢を一括した（5～16）。

5・8～10は、内湾する口縁部に文様帶を持つ深鉢である。5は口縁上端に把手が付く。内湾する口縁部に2本の弧状隆帯が配され、これに沿ってキャタピラ文・沈線文・刻みが施される。他は縦位の集合沈線で充填する。口縁下端は横位の隆帯・半裁竹管による平行沈線文で区画され、頸部は沈線による波状文が廻る。隆帯上は連続爪形文が施される。8・9は口縁部で、隆帯による重三角区画文が配される。口唇部直下と隆帯に沿ってキャタピラ文、および連続する三角押文を沈線状に施している。隆帯上の一部は刻みが施される。10は口縁部に隆帯による梢円状区画を配する。隆帯に沿って沈線文・刻みが施され、区画内は半裁竹管による刺突文を施す。口縁下端は隆帯・キャタピラ文で区画される。胎土は石英が目立つ。

6・11は、胴部に縦・斜位の隆帯が配される深鉢である。6は丸く内湾した口縁部を持ち、無文の口縁部下に把手が付く。隆帯に沿ってキャタピラ文・三角押文・沈線による波状文が施される。胴部外面に粘土紐の輪積み痕が見られる。推定径19cm。11、横位・斜位の隆帯の脇にキャタピラ文・沈線による波状文が施される。

12は、縄文地に幅広の浅い沈線文が横位に施され、沈線の一部は下方へ派生し屈曲する。

13～15は、隆帯による横位の区画文を持つ深鉢で、梢円区画（13・14）と方形区画（15）に分けられる。13は半裁竹管による半隆帯で区画され、下位は波状文を境に縄文が施される。14は深鉢の底部で、区画内部の沈線は三角押文を間隔おいて押引きし施文されている。15は隆帯による方形区画に沿って三角押文とキャタピラ文を施す。

b種 縦位区画文を持つ各種の鉢を一括した（16～21・31）。16は胴部が大きく膨らむ鉢で、縦位の隆帯に沿って半裁竹管による半隆帯・爪形文・沈線による波状文が施される。隆帯の上には爪形文が施される。17～21は深鉢で、胴部に半裁竹管による半隆帯で縦位区画文が配されるが、横区画を伴うもの（18）もある。区画内の施文には、集合沈線（17～20）、沈線による波状文とキャタピラ文（21）、連続爪形文や竹管による円形刺突文（18）がある。20・21は刻みを持つ隆帯が伴う。31は深鉢の胴部に「J」字状の隆帯が背向いに施されて

いて、この上部に菱形状の区画文が配されるものと思われる。隆帯の側面はキャタピラ文で、隆帯に沿ってキャタピラ文を地文にした交互の刻み・三叉文状の刻み・半隆帯が作る。

c種 胸部に大きな波状隆帯を配した深鉢である（7・22）。波状隆帯による区画上部は縦位の集合沈線を充填し、下部は無文となる。隆帯上は連続爪形文や交互の刻みが施される。7は円筒状の器形で、口縁部に3段の太い隆帯を廻らし下段に爪形文を施す。22は無文地区画の下位に横位の沈線・刻みが施される。いずれの胎土にも金雲母が目立つ。

d種 口縁部を無文として、頸部に梢円区画の横帶文を配した深鉢（23～29）。23・24は隆帯上に連続爪形文を持ち、区画内に沈線による三叉文が施される。25～29は隆帯上に刻みを持ち、区画内に縦位の集合沈線と刻みを施し、胸部には網文を施す。27の網文は斜・縦位に施され一部で羽状となる。26・27の胎土には金雲母が目立つ。

e種 角張った口縁部を持つ深鉢（30）。無文口縁部の一端に円環状の把手が付き、ここから隆帯が横方向に派生している。把手は連続する刻みで縁取られ、外面に交互の刻みや短沈線が施されている。口縁下は横位の粗い沈線が廻らされている。

f種 無文地の胸部に隆帯を廻らした深鉢（32）。円筒状の器形で、隆帯上に連続する刻みを施す。

g種 主に網文が施された深鉢（33・34）。33は円筒状の器形で、口縁部に2本の隆帯に挟まれた小波状隆帯を施す。推定径13cm。胎土は金雲母が目立つ。34は外反気味に開く器形で、口縁部が無文となる。いずれも斜網文である。

h種 浅鉢形土器を一括した（134・135）。口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、連続する押圧を加えた隆帯が廻る。134は口縁上端にキャタピラ文・沈線による波状文が施される。135は胎土に金雲母が目立つ。

## 第2類 両戸尻式期に比定される。

a種 無文の口縁部から隆帯が垂下する深鉢（35・36）。35、丸く内湾する口縁部の一端に渦巻き状の把手が付き、これから隆帯が垂下する。36、波状口縁で角張り気味に内湾する器形である。波頂部から垂下する隆帯、および口縁部の角張った端部にはそれぞれ連続する刻みが施されている。

b種 波状の口縁下が丸く膨らむ深鉢で、隆帯による梢円区画の横帶文が配される（37）。隆帯の交点に刻みを持つ突起が付き、連続刺突文が隆帯の脇と口縁直下に施される。口径12cm、最大径18cm。胎土に1mm以下の金雲母が目立つ。

c種 太沈線や隆帯によって文様が構成される各種の深鉢を一括した（38～52）。

38～40は波状の口縁下が丸く膨らむ器形と思われる。38・39は口縁部が無文で、波頂下に沈線による渦巻文（38）や円文（39）が配される。40は、口縁部に縦位の集合沈線が施され、波頂部は円形の孔と三叉文が配される。41は括れた部分に円弧状の隆帯が付き、隆帯の上は連続する刻みが施される。

42～47は大型の深鉢で、胸部が膨らむ器形と思われる。42～47は隆帯による区画の中に集合沈線や刻み・三叉文が施され、43・44は鎖状隆帯が付く。

48～50は胸部が大きく括れた器形である。48はU字・逆U字状の隆帯が縦位に接続し、この接続部に刻みを施した突起を付ける。49は屈折底で斜位の隆帯が付く。50は胸部に縦位の平行沈線文を配し、胸部下位の括れた部分に低平の隆帯を廻したものと思われる。

51・52は比較的直線的に開く器形と思われる。51、刻みを持つ隆帯と1本の沈線文で方形の区画を配する。52は隆帯で横位の梢円文が配され、内部に三叉状の沈線文が施される。

d種 胸部が大きく括れた深鉢で、地文が条線地となる（53）。隆帯を持ち、隆帯上は連続する刻みが施される。胎土に石英粒を多く含む。

e種 主に縦文が施された深鉢 (54~57・59~62)。

54は口縁部が内湾し、胴部にかけて大きくくびれた器形で、全面に縦位の縦文が施される。口縁上端の一部に把手の跡と思われる剥落痕が残っている。

55~57は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁下が丸く膨らむ器形である。口縁部は無文で、胴部全面に縦位の縦文が施される。55の口縁の一部には沈線による三叉文が施される。57は遺物集中部Aの出土である。胴中位から口縁部にかけての1/2が欠損する。推定口径26cm・器高34.5cm・底径14cm。無文口縁の一端に把手が付き、沈線による三叉文・集合沈線間に交互の刻み目が加えられる。器面の吸炭は、外面(口縁部・把手の端部・底部)、および内面(胴下半部)に見られる。

59~62は、胴部を横位の隆帯で区画し、下半部に縦文を施した深鉢である。59・60は胴部が弱く括れ、斜縦文が施される。61・62は比較的直線的に開く器形で、縦位の縦文が施される。いずれも隆帯の上に連続する刻みを持ち、上半部の区画内は弧状の隆帯・三叉文(60)、縦位の集合沈線(61)が施される。60は隆帯上に矢羽状の刻みを持ち、胎土に石英粒・金雲母が多く含む。

f種 浅鉢形上器 (58・136・137)。58は遺物集中部Aの出土である。口径36cm・底径12.5cm・器高は10.5cmだが波頭部までの最大高は15.5cmを測る。口縁部から胴部の一部を欠く。口縁部内面に文様帶を持つ。文様帶は口縁部が波状を呈した部分を中心に見られ、隆帯による渦巻文・円文・三叉文が連なる。隆帯は低平で幅が広く、一部に交互の刻みが施される。小さな穿孔1個が口縁部に見られる。胎土は2mm以下の砂粒を含む。器面は、内外面に斑状の吸炭が見られる他、口縁部内面には黒色の塗膜状付着物が断片的に残る。136は口縁部で強く屈折し波状を呈する。口縁部に円文・沈線文が配される。焼成は悪く、「(2)土器」の項の冒頭で述べた焼成不良の一例に含まれる。137は内湾する器形に鈎が付くもので、鈎の一部は波状を呈する。鈎の端部に連続する刻みが施され、赤彩が残る。

### 第3類 縦文を一括した (63~71)。

第1類、第2類に伴うものである。63・64は深鉢の胴部で、縦位の縦文が施される。65は縦文地の胴部に人体文が付き、連続する三角押文が施される。66~71は深鉢の底部で、胴部にかけてわずかに反る器形のもの(66~68)、屈折するもの(69~71)に分けられる。いずれも縦位の縦文が施される。

### 第4類 把手を一括した (75~86)。

75~78は深鉢の口縁部に付く把手で、三角状に尖った形(75・76)・山形(77)・団扇状(78)がある。75の把手左面は連続する刻みで縫取られ、この縫取りから派生して隆帯が垂下している。把手右面には深い窪みを持つ。隆帯の上は地文の縦文が施されている。76は連続する刻みで縫取られ、この内側に縦位の集合沈線と交互の刻みを施す。77は、表面に渦巻状隆帯、内面に浅い円文と沈線による三叉文を施す。78は、表面が連続する刻みで縫取られ、この縫取りから派生した隆帯が把手の中央部を垂下する。内面は皿状の円文を持つ。なお、把手の両端には擦り切り状の摩滅痕が一对認められる(図面中の矢印部分)ことから、土錐として再利用された可能性がある。重さは160g。79は橋状の把手で、内湾する深鉢の口縁部に付く。口縁部は連続する爪形文が横位に施される。80~83は双孔の把手で、深鉢の口縁下や胴部の括れに付く。いずれも孔の周囲は連続する刻みで縫取られる。80の双孔は貫通しない。84は蛇体把手。85は団扇状把手の側面部と思われる。円孔と沈線による三叉文が両面に施される。86は大型の双孔把手で、孔の周りを幅広の沈線で囲んでいる。

以上のうち、79が第1類、他は第2類に伴うものと思われる。

### 第5類 無文の底部を一括した (72~74)。

第1類、第2類の深鉢に伴うものと思われる。

#### 第IV群 中期後葉～末葉の土器 (第15図～16図、図版15)。

##### 第1類 曾利式に比定される土器。

a種 口縁部が大きく開く深鉢で、胴部に粘土紐による隆帯が施されたと思われる深鉢 (88～104)。口縁部は条線による斜行文 (89)・波状の隆帯を作り重弧文 (90・91)・縦文 (92)、無文 (88・93・95) がある。頸部には粘土紐による波状隆帯が施される (92～95)。94～104は胴部で、地文によって条線地 (94～100)と縦文地 (101～104)に分けられる。96は、頸部に並行する隆帯が配され一部で縦に連結する。隆帯の上に連続する刻みが施される。99は弧状の隆帯上に半裁竹管で刻みが施される。100の地文は細かな条線が施される。

b種 口縁部に隆帯と沈線によって連続する梢円文を配した深鉢 (105・106)。口縁部は肥厚する。11縁下は、105は条線が施され、106は無文である。

c種 隆帯による渦巻つなぎ弧文を配する深鉢 (107)。口縁部や口縁下に縦位の沈線が施される。

d種 胴部を2本一組の沈線で縦に区画し、内部に斜交する短沈線や波状の沈線を施す深鉢 (108・109)。108は、口縁部に沈線による横長の区画を配し、胴部には櫛齒状の短い条線が伴う。

e種 胴部に短沈線による「ハ」の字文を持つ深鉢 (110～115・118)。110～114は沈線で区画される。

f種 櫛齒状工具で施文された各種の深鉢を一括した (116・117・119～121)。116は櫛齒状の刺突文が「ハ」の字状に配され、e種と関連する。117は櫛齒状の刺突文と短い条線文が施される。119は胴部を2本一組の沈線で縦に区画し、内部に櫛齒状の刺突文を斜位に施す。120・121は胴部に櫛齒状の条線文が波状に配される。このうち、120は口縁部に1本の幅広い沈線を廻らし、胴部は縦位の隆帯で区画する。

g種 深鉢の大型把手 (87)。

h種 浅鉢形土器 (138・139)。138は条線。139は2本一組の隆帯を波状に配し条線を施す。

i種 有孔釦付土器 (143)。鋸に穿孔2個が認められる。胴部は弧状の沈線文内に列点を施す。

##### 第2類 加曾利E式に比定される。

a種 口縁部に隆帯による弧状・渦巻状の文様を配した深鉢 (122～126)。122、口縁上部に2本一对の隆帯で横S字状と思われる文様を配する。地文は縦文である。123は遺物集中部Bの出土で、胴下半部、および口縁の一部を欠く。口径21.5cm・残存高11cm。口縁部に隆帯と沈線による半月形の区画を配し、区画内に縦文を施す。隆帯の波頂部は沈線による渦巻文が施される。胴部の文様施文は、口縁部に隆帯を貼付した後に次の順序で行われている。①縦文を施し、②2本1組の波状沈線文を施し、③胴上部に1本の沈線を横に廻らす。縦文は無節である。124～126は内湾する口縁部を隆帯で区画し、区画内に縦文を施す。124は半月形区画、125は方形区画であり、125・126の頸部は無文となる。

b種 口縁部に沈線による連弧文を配した深鉢 (127・128)。127は連弧文内に列点を充填する。128は撲糸文地に沈線を施している。

c種 口縁部に沈線文と列点文を配した深鉢 (129)。波状口縁で、地文は縦文である。

d種 胴部に弧状の縦文帯を配した深鉢。沈線区画 (130)・微隆起線区画 (131) がある。

e種 浅鉢形土器 (140)。隆帯による梢円区画文や渦巻文を配し、区画内に縦文を施す。

##### 第3類 口縁部が屈折気味に内湾する深鉢で、口縁部に縦文を施した隆帯を持つ (132・133)。

132は、無文地の口縁部の上下を隆帯で区画し、この内部に2本の波状隆帯を組み合わせた文様を配している。斜縦文が隆帯上・口唇上面・頸部に施される。隆帯は粘土紐の貼付によるもので低平である。胎土は金雲母・赤色粒子を含む。133は、下端の隆帯が鋸状に張り出す器形で浅鉢の可能性もある。口縁部の上下を隆帯で区画し、この内側に沿って半裁竹管による平行沈線文を廻らす。さらに区画の中央部は半裁竹管による半隆帯が波状に施される。口縁部の地文は斜縦文で、頸部は無文。口縁部の内面に断面三角形の隆帯を施す。胎土

は1~2 mm大の金雲母・石英が目立つ。

**第V群 浅鉢形土器** (第17図134~142、図版16)。

第III・IV群に伴うものと思われる (141・142)。口縁部が内湾する無文の浅鉢で、口縁部に1本の沈線を廻らす。142は口縁部内外面と胴部内面が磨かれ、口唇部には赤彩が認められる。

**第VI群 後期初頭から前葉の土器** (第17図144~150、図版16)。

**第1類 称名寺式に比定される (144~147)。**

平行沈線文を屈曲的に施した深鉢。144・145は、波状口縁の口縁下に屈折する沈線文が配される。147は沈線間に列点文が施される。

**第2類 堀之内式に比定される (148~150)。**

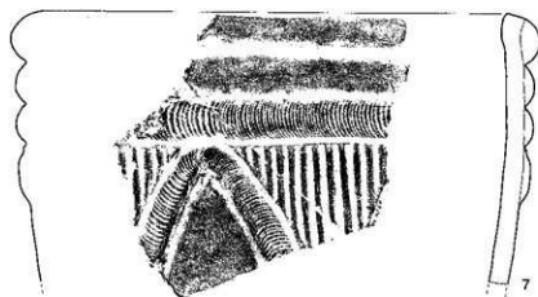
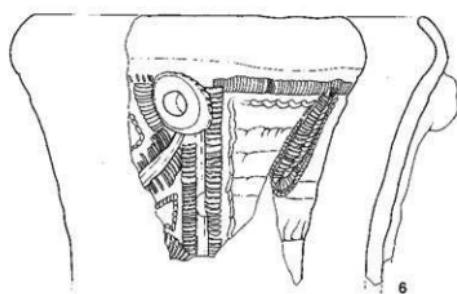
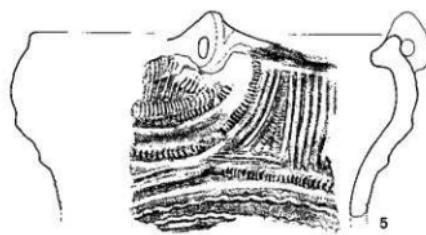
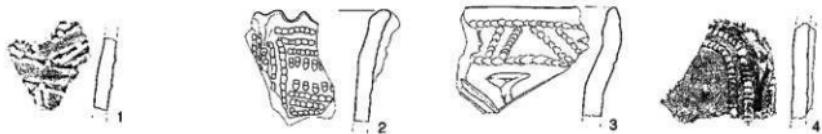
148は、ゆるくくびれた胴部に沈線文を施した深鉢で、縱・斜位の沈線文が組み合わされる。149・150は磨消繩文を施した深鉢で、149は丸く張り気味の胴部に弧状の沈線文を配し、150は直線的に聞く深鉢の胴部に三角文を配したものである。

**第VII群 後期中葉の土器** (第17図151~154、図版16)。

加曾利B式に比定される。151~153は、器面が良く磨かれ平滑である。151、直線的に聞く深鉢の胴部で、横位の多条沈線間に波状沈線を組み合わせた文様を施す。黒色・褐灰色を呈する。152は内湾口縁で、屈曲して胴部に至る深鉢である。口縁上端に刻みを持つ。口縁部上位に平行沈線文を廻らし、間に細かな繩文を施す。頸部に沈線を廻らす。153、浅鉢。口縁上端が外研ぎ状の形となる。文様帯が口縁部外面に配され、上端に1本の沈線、この下に5本の沈線を廻らし、沈線間に細かな繩文を施す。154は無文の深鉢で、内面は整形時の凹凸が見られる。黒色の土器で、胎土に金雲母が目立つ。

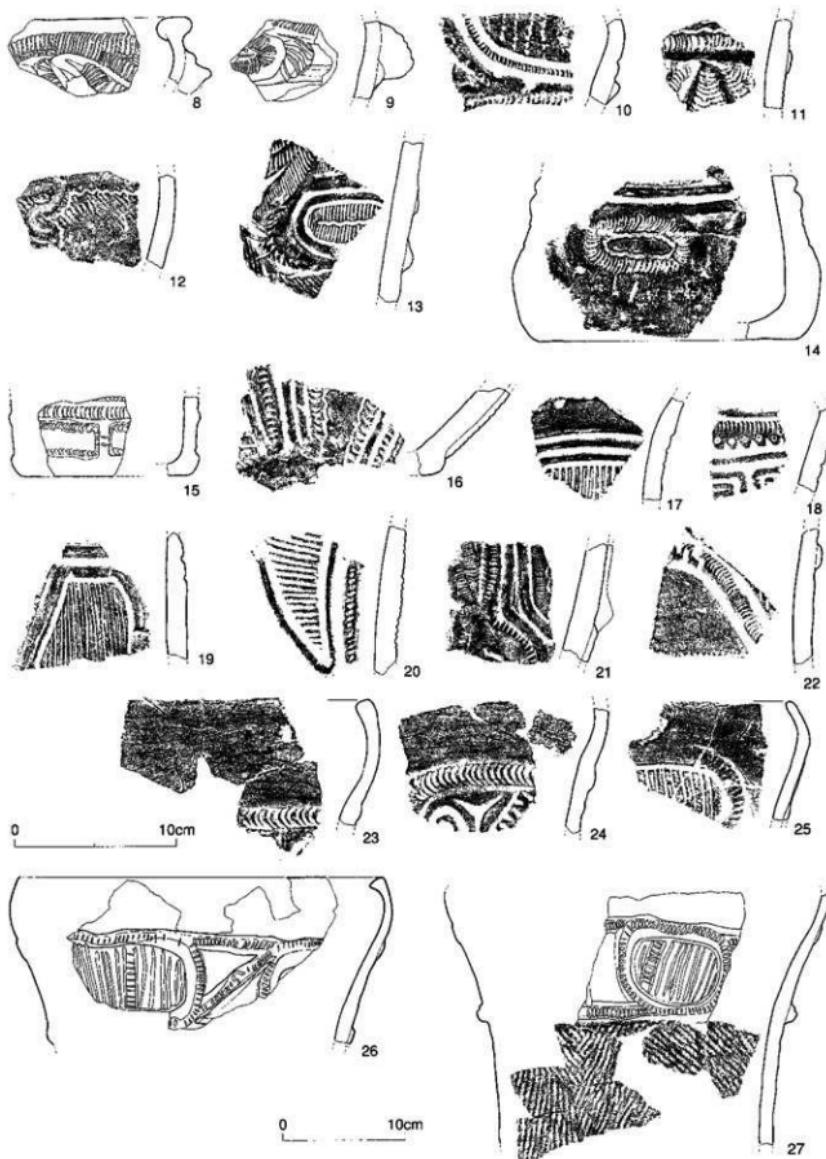
**第VIII群 把手を一括した (第17図155~157、図版16)。**

第VI群・VII群に伴う。155は波状口縁の深鉢で、口縁上端は内傾する。波頂部に橋状把手が付き、内面は渦巻状。156、擬宝珠状の把手で、頂部に「8」の字状の貼付文が付く。器面は黒色で、良く磨かれて平滑である。157、波状口縁の深鉢で、口縁上端は内湾する。波頂部に筒状の把手が付き、内面に「8」の字状の貼付文が付く。

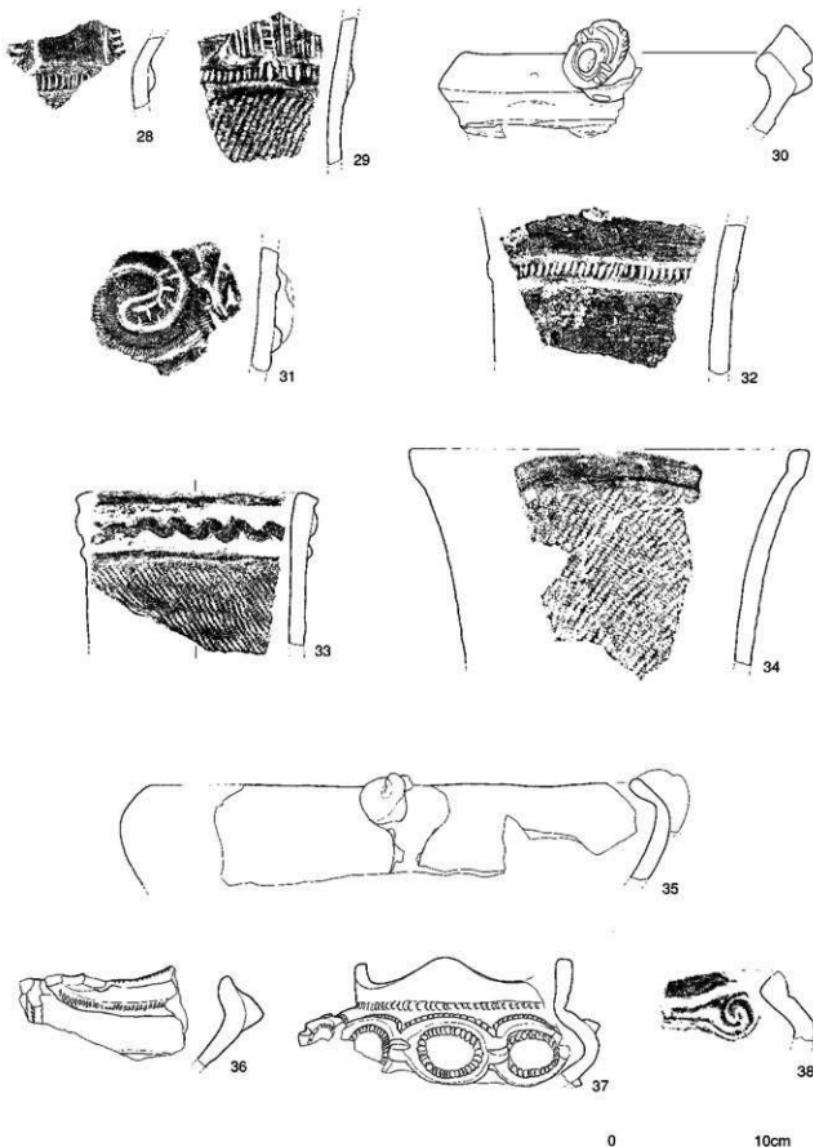


0 10cm

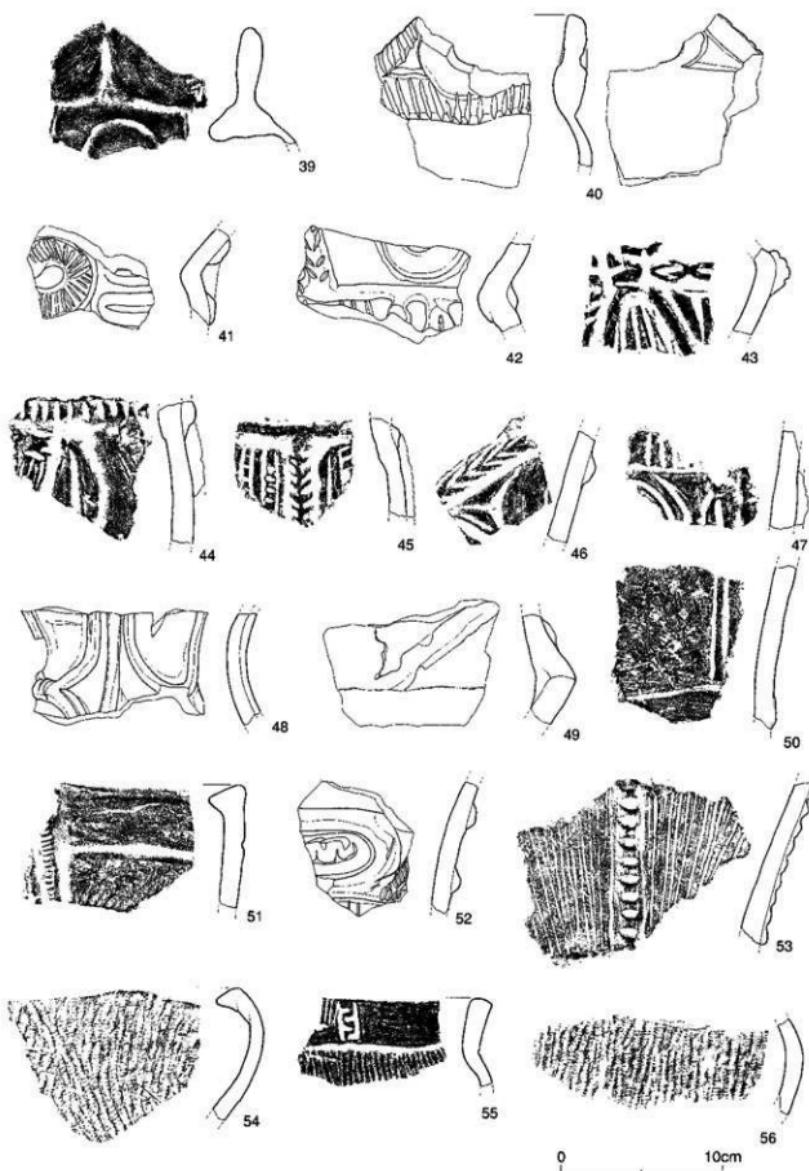
第8図 土器（第I・II・III群）



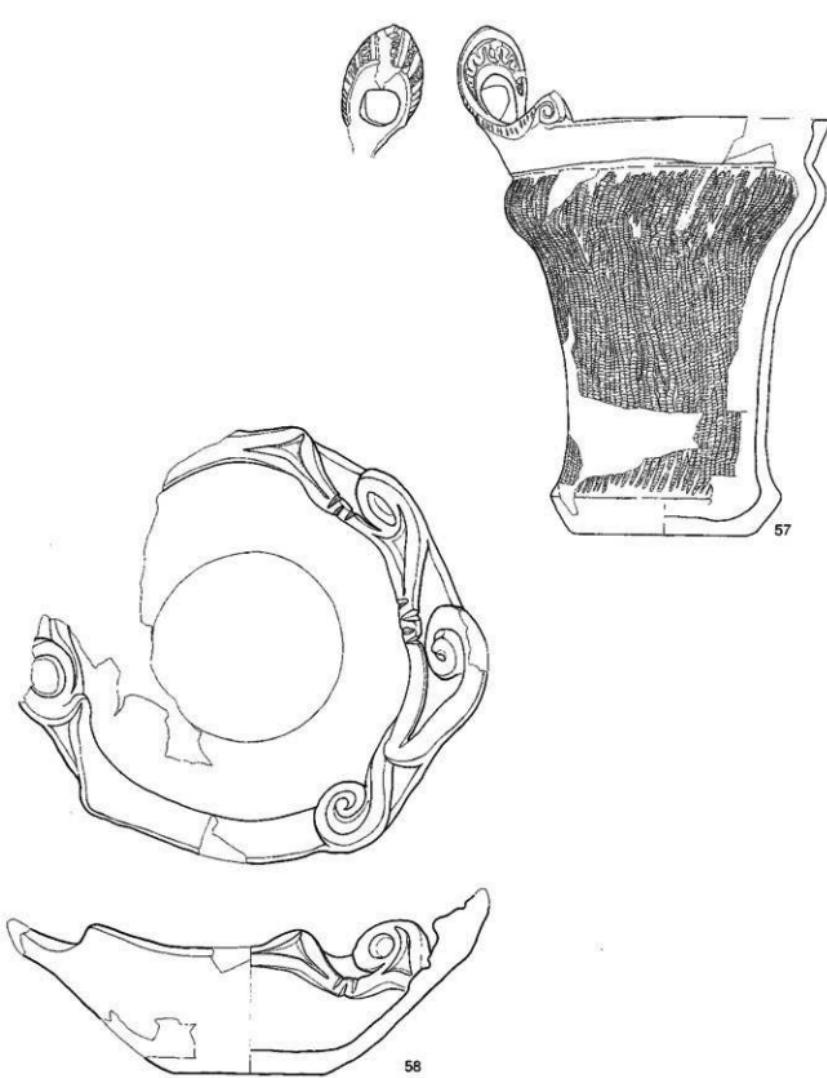
第9図 土器（第三群）



第10図 土器（第Ⅲ群）

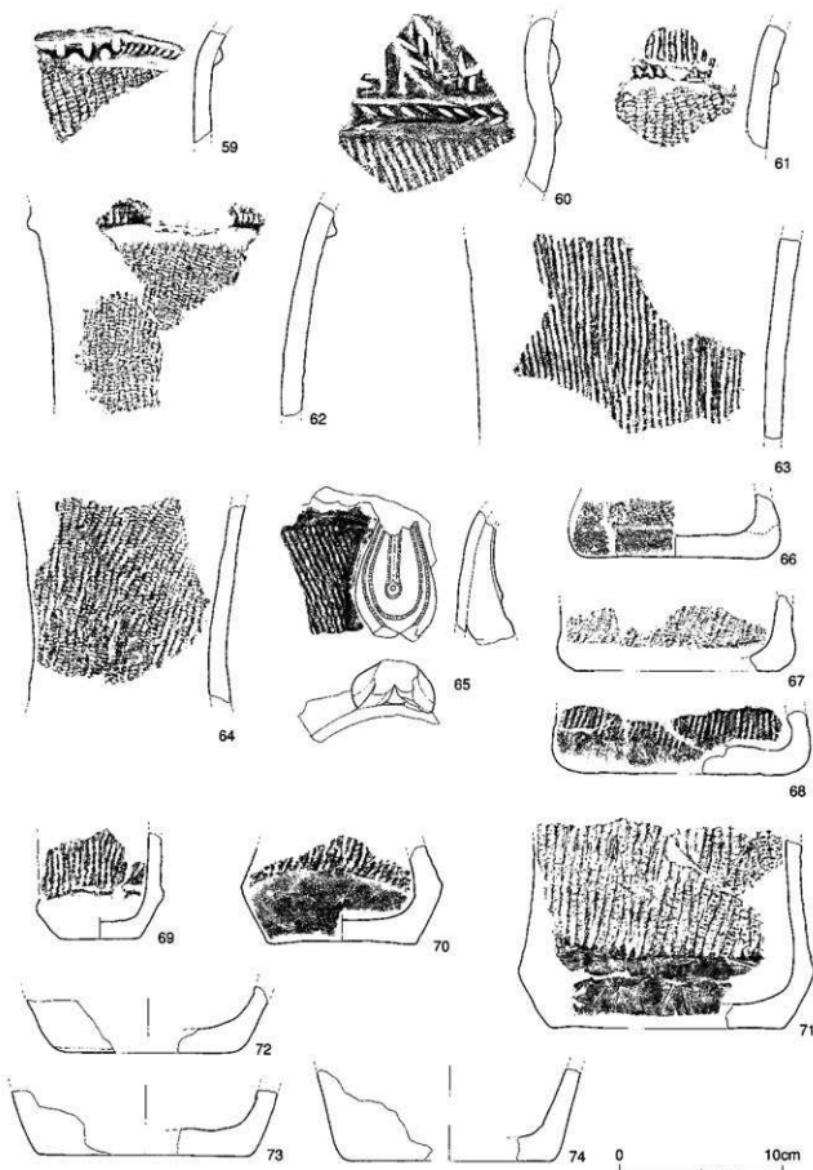


第11図 土器（第Ⅲ群）

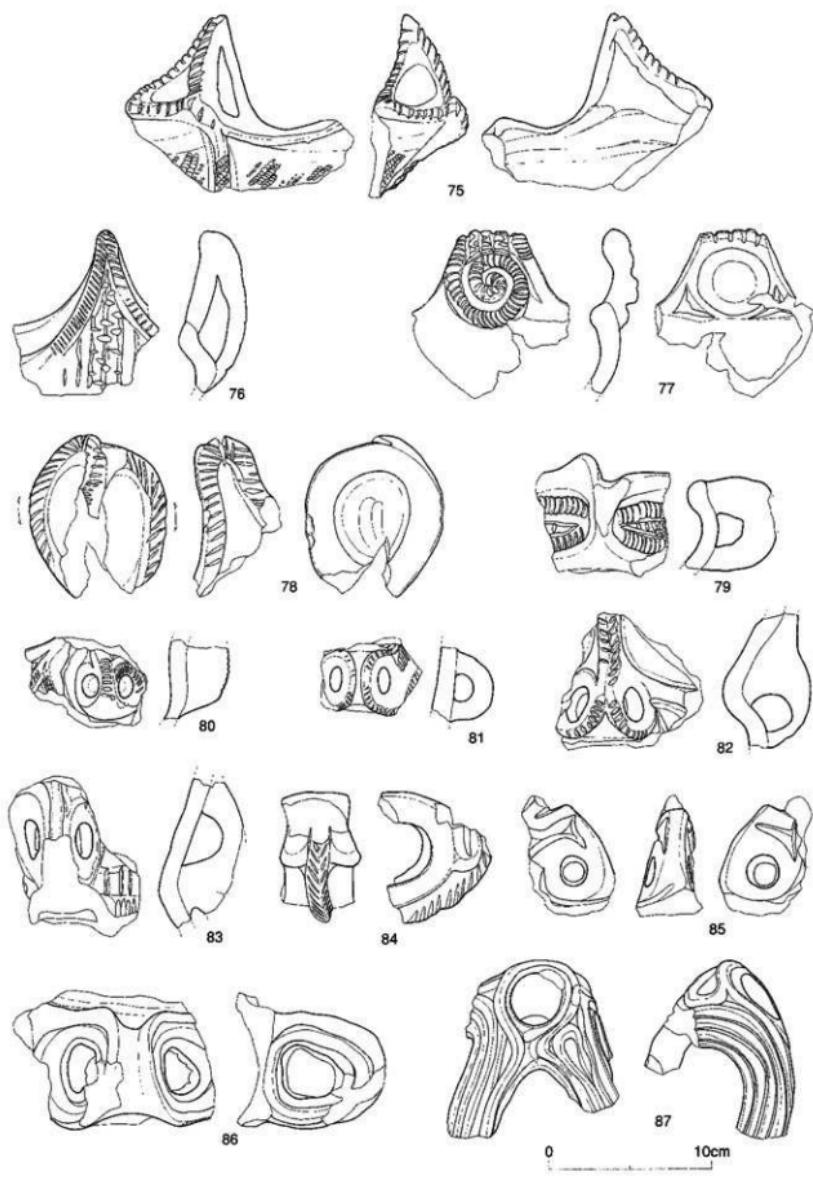


0 10cm

第12図 土器（第Ⅲ群）



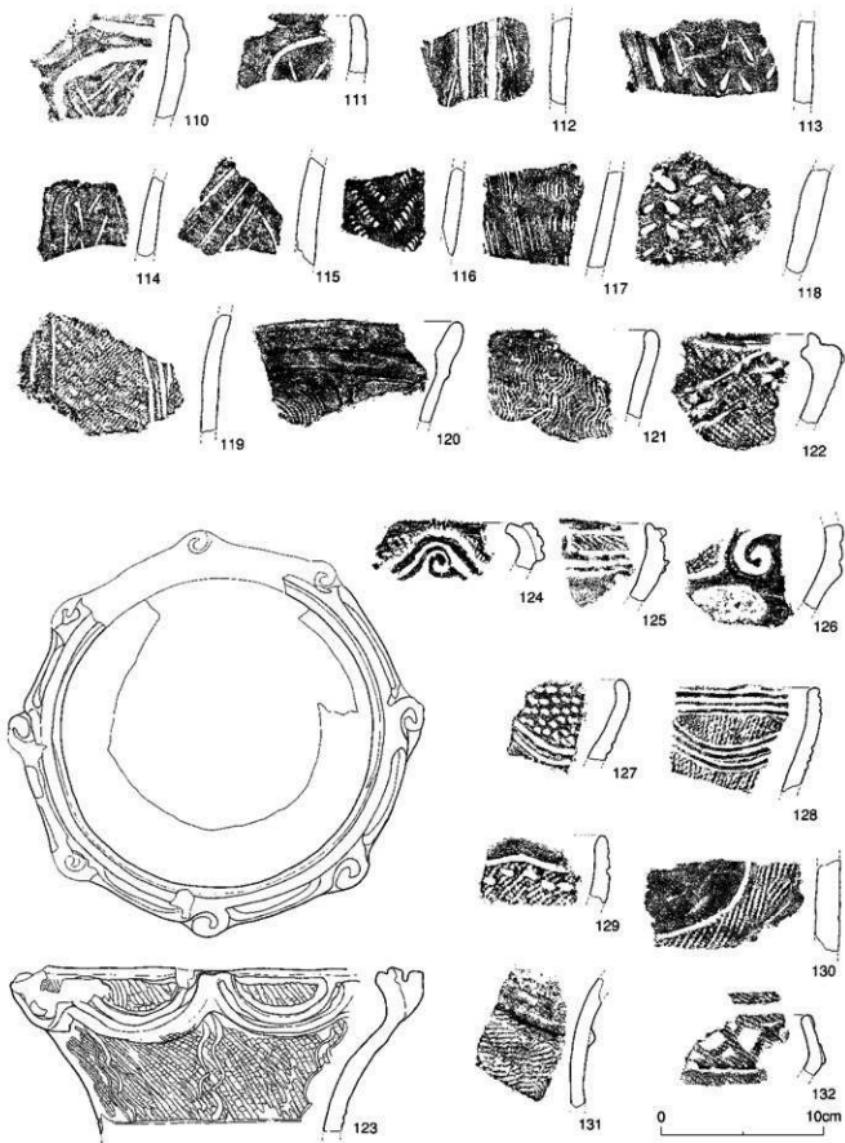
第13図 土器（第三群）



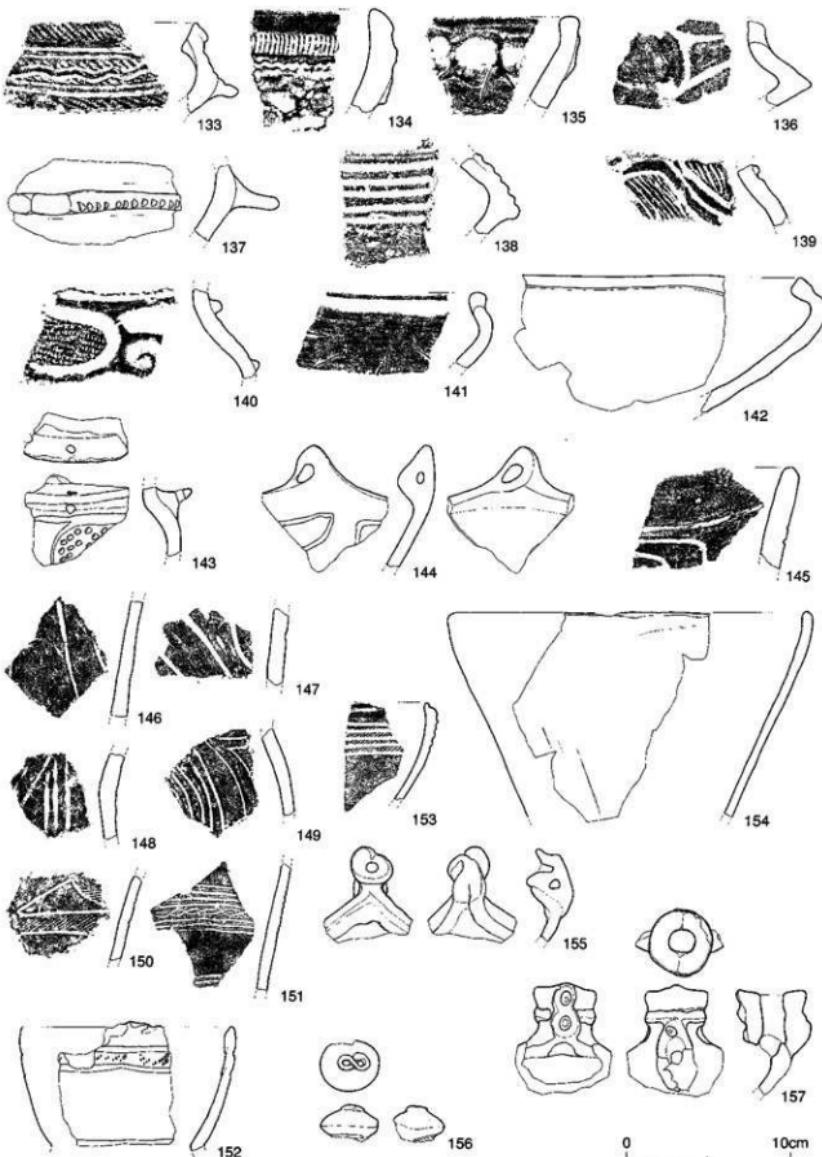
第14図 土器（第Ⅲ群）



第15図 土器（第IV群）



第16図 土器（第M群）

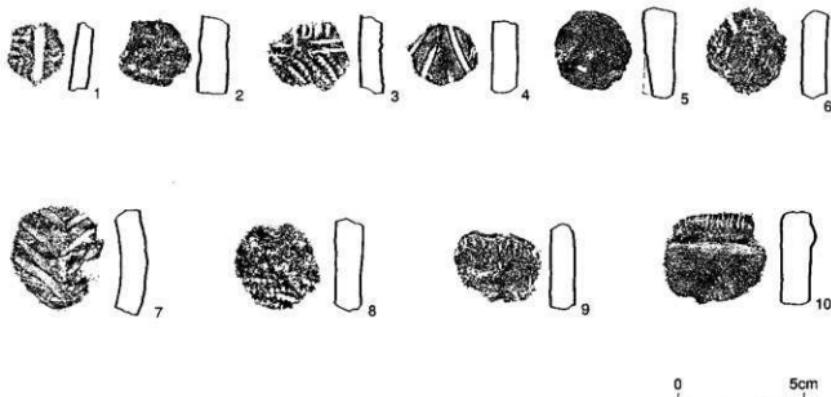


第17図 土器 (第IV～VI群)

(3) 土製品

土製円盤が10点出土した。他の遺物と混在し特異な出土状況は見られない。また、土錠の可能性がある土器片が1点出土している(第14図78)。

土製円盤(第18図、図版16)。平面は円形を基調とし、10は楕円状となる。周縁は丸く摩滅するものや、打ち欠きの状態で角を持つものに分けられる。6は底部片を利用して作られ、他はすべて胴部片である。第Ⅲ群・第Ⅳ群(中期中葉・後葉)に伴うものと思われる。



第18図 土製円盤

番号	出土区	最大径(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
1	T層	2.8	0.7	9	周縁打ち欠き。沈線区画の縦文。
2	B-2区Ⅲ層	3.4	1.3	18	周縁丸く摩滅。無文。
3	B-2区Ⅲ層	3.5	1.0	13	周縁丸く摩滅。縦文・平行沈線文・キャタピラ文。
4	C-1~2区	2.7	0.9	10	周縁打ち欠き。沈線による「ハ」の字文。第Ⅳ群第1類c種。
5	A-1区	3.3	1.2	20	周縁打ち欠き。無文。
6	B-2区Ⅲ層	3.6	1.1	19	周縁打ち欠き。底部。
7	2号住居土	4.3	1.1	23	周縁打ち欠き。沈線が斜交する。第Ⅳ群第1類d種。
8	A-1区	3.7	1.1	21	周縁丸く摩滅。縦文施文。
9	A-1区	3.7	1.1	19	周縁丸く摩滅。沈線による波状文・キャタピラ文。第Ⅲ群第1類a種。
10	A-1区	4.1	1.2	25	周縁丸く摩滅。隆帯に沿ってキャタピラ文。第Ⅲ群。

第1表 土製円盤一覧表

#### (4) 石 器

器種は、石鎚・石錐・加工痕のある剥片・石匙・横刃形石器・礫器・打製石斧・磨製石斧・磨石類・円石・石皿・石錘がある。以下に器種ごとの概要を述べ、詳細は第2~3表にまとめた。

##### 打製石斧（第19図1~第22図71、図版17）

石器組成の主体を占める。平面形態は多種にわたるが、基本的に短冊形を主体に分銅形・梢円形・バチ形、刃部が長軸に対し斜めに付く形に分けられる。短冊形には、両側縁の中央部をわずかに抉り込んだもの（65・64・69）、基部が尖るもの（21）、小型のもの（8）などの形態が含まれる。両刃が多く、片刃（68）はバチ形。大半が破損している。使用による磨耗痕が、短冊形5点の刃部や中央部に認められた。

##### 礫器（第22図72、第23図73、図版18）

礫の両側縁を大きく打ち欠いて刃部としている。72は両刃、73は片刃である。いずれも自然面が残る。

##### 石匙（第23図74~81、図版18）

つまみが刃部に対して縱（77~79）、斜め（74~76・80）、横（81）に付くものがある。大半の刃部は直線的で、他に外湾（77）・内湾（79）するものがある。

##### 横刃形石器（第23図82~86、図版18）

横長の縁辺を刃部とした剥片石器。大半が剥片をほとんど未加工のまま用い、刃部には不規則な剥離痕が見られる。大半の刃部は直線的で、他に外湾（83）するものがある。自然面を残すもの（83・85・86）がある。

##### 磨石類（第24図87~101、図版18）

磨石の他に敲石・円石の機能を併せ持つものも含めた。平面が円形・梢円形で一面に磨面を持つものや、表裏や両側面に磨面を持ついわゆる石鍛形には、表裏や端部に敲打痕も認められる。他に、小型礫の一面に磨面を持つもの（93~97）、棒状礫の側面や端部に磨面を持つもの（98~101）がある。

##### 凹石（第24図102、図版18）

裏面に敲打痕も認められる。

##### 石皿（第24図103・104、図版18）

103は手のひらに収まる小型の石皿で、裏面の中央部に凹みを持つ。104は片面に平滑な磨面を持ち、断面凸錐形の凹みが複数認められる。

##### 磨製石斧（第24図105~第25図108、図版18）

105は定角式で、美しく研磨された緑色の石斧である。他は乳棒状で断面は梢円形である。下半部を欠損する。107は器面に浅い凹みが認められ、欠損後に再利用されたものと思われる。108は未製品で上半部を欠損する。乳棒状で断面は梢円形である。ほぼ全面に整形時の敲打痕が認められ、一部に自然面が残る。

##### 石錘（第25図109~112、図版18）

扁平な礫の両端に、擦り切りによる紐掛け溝が残るものや、打ち欠きの中心に紐掛け溝が残るものがある。

##### 石錐（第26図114~122、図版18）

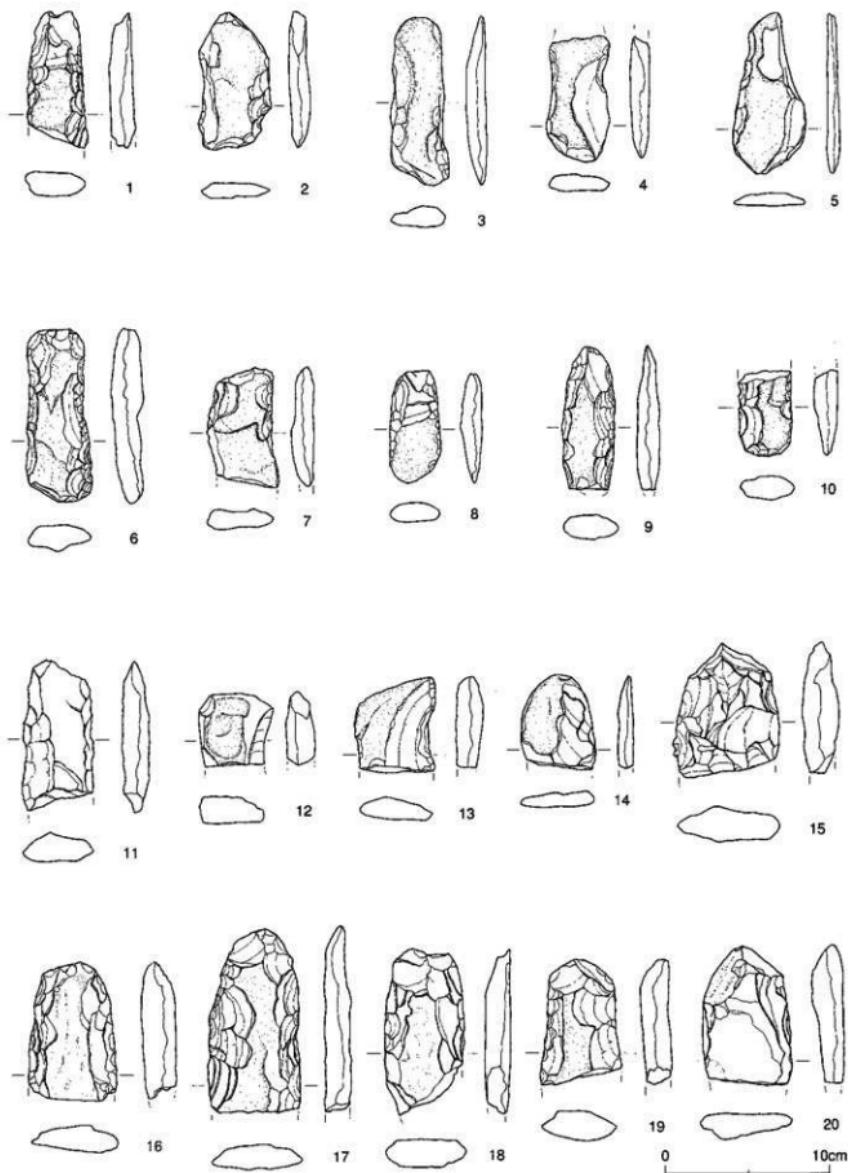
人半が凹基無茎の形態で、脚を欠損したものが多い。黒耀石製が多い。

##### 石錐（第26図123、図版18）

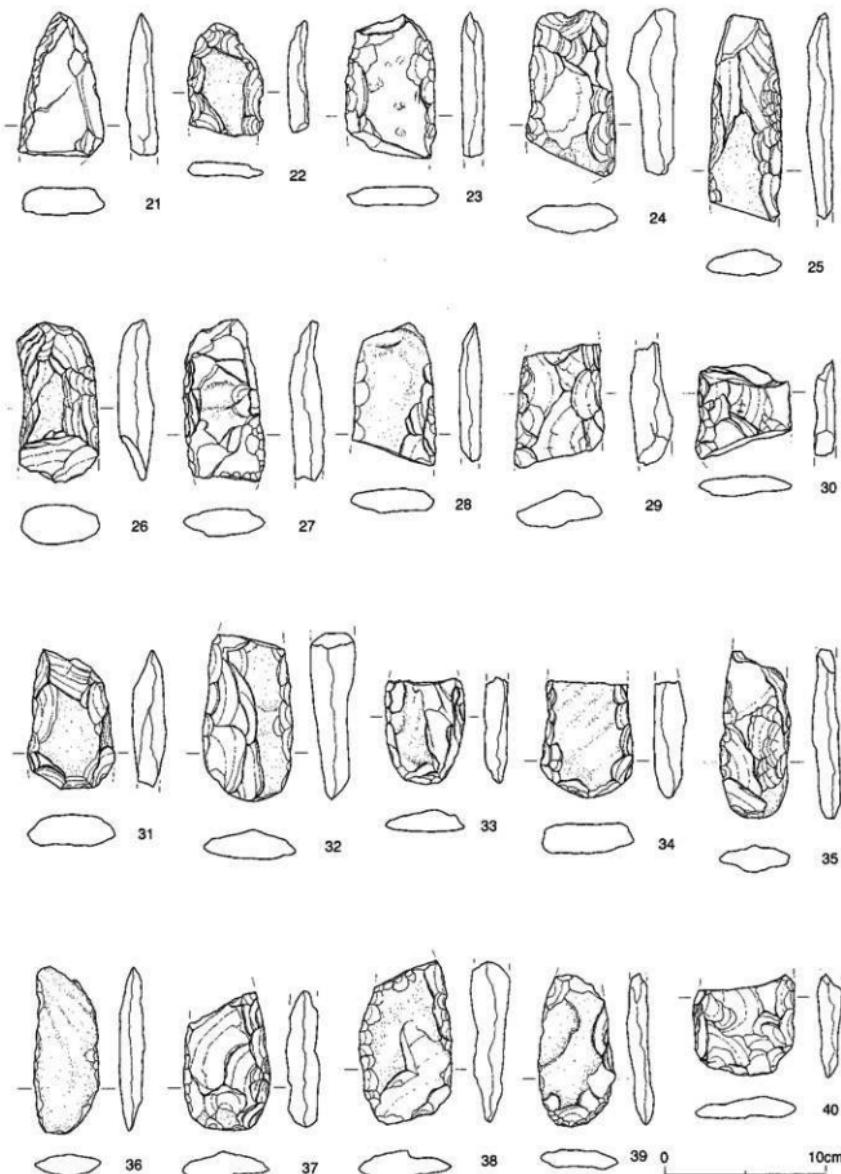
断面三角形の黒耀石製である。

##### 加工痕のある剥片（第25図113、第26図124~131、図版18）

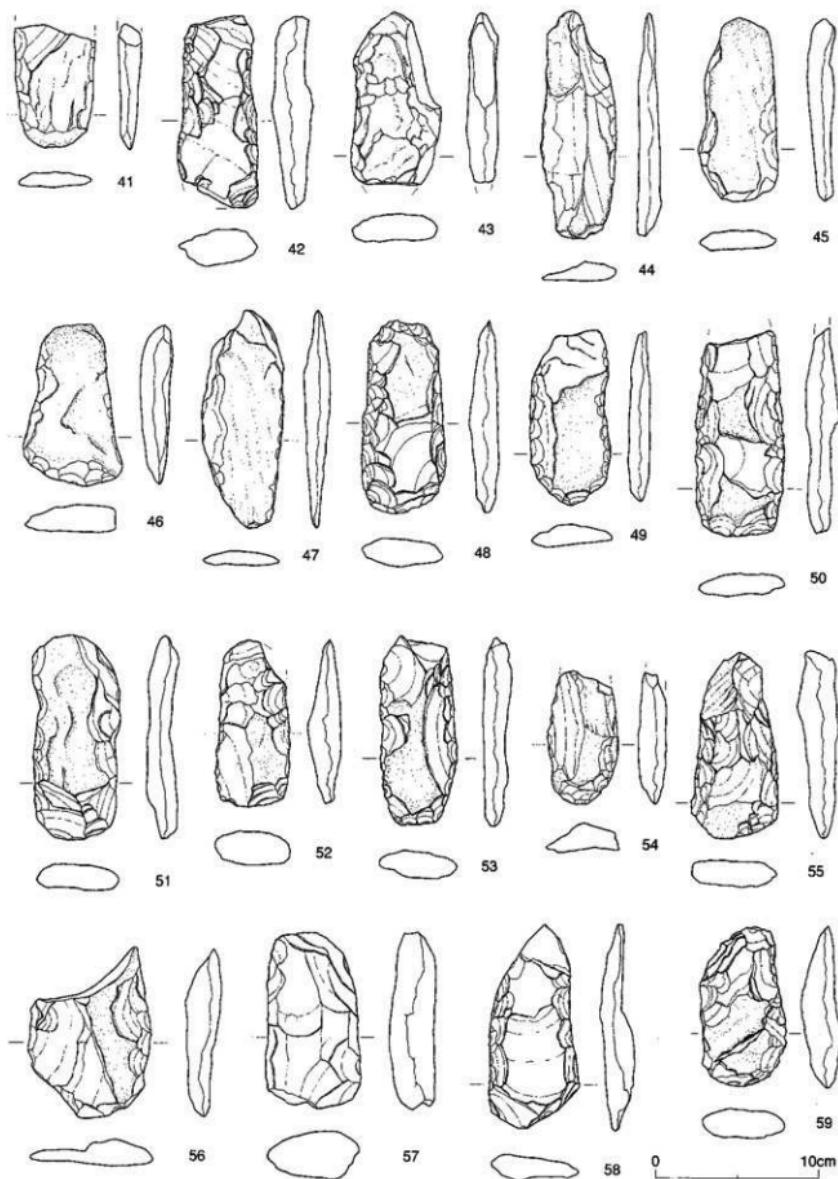
剥片のうち、二次加工が認められるものを一括した。側縁に微細な加工痕が連続するものが多く、石鎚や石錐の未製品が含まれる可能性がある。113は全周に粗い加工がされたもの。113を除き、すべて黒耀石製である。剥片・碎片は140点出土し、このうちチャート1点、水晶1点の他はすべて黒耀石である。



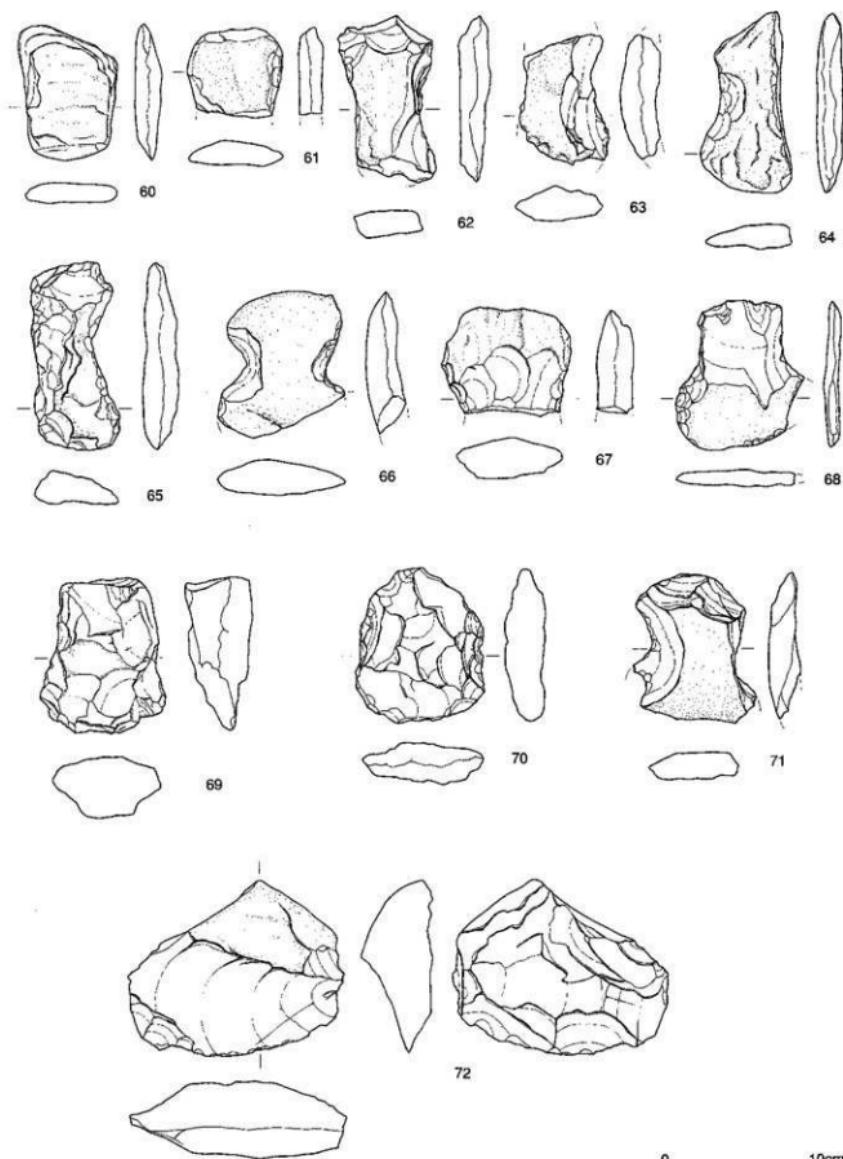
第19図 石器（打製石斧）



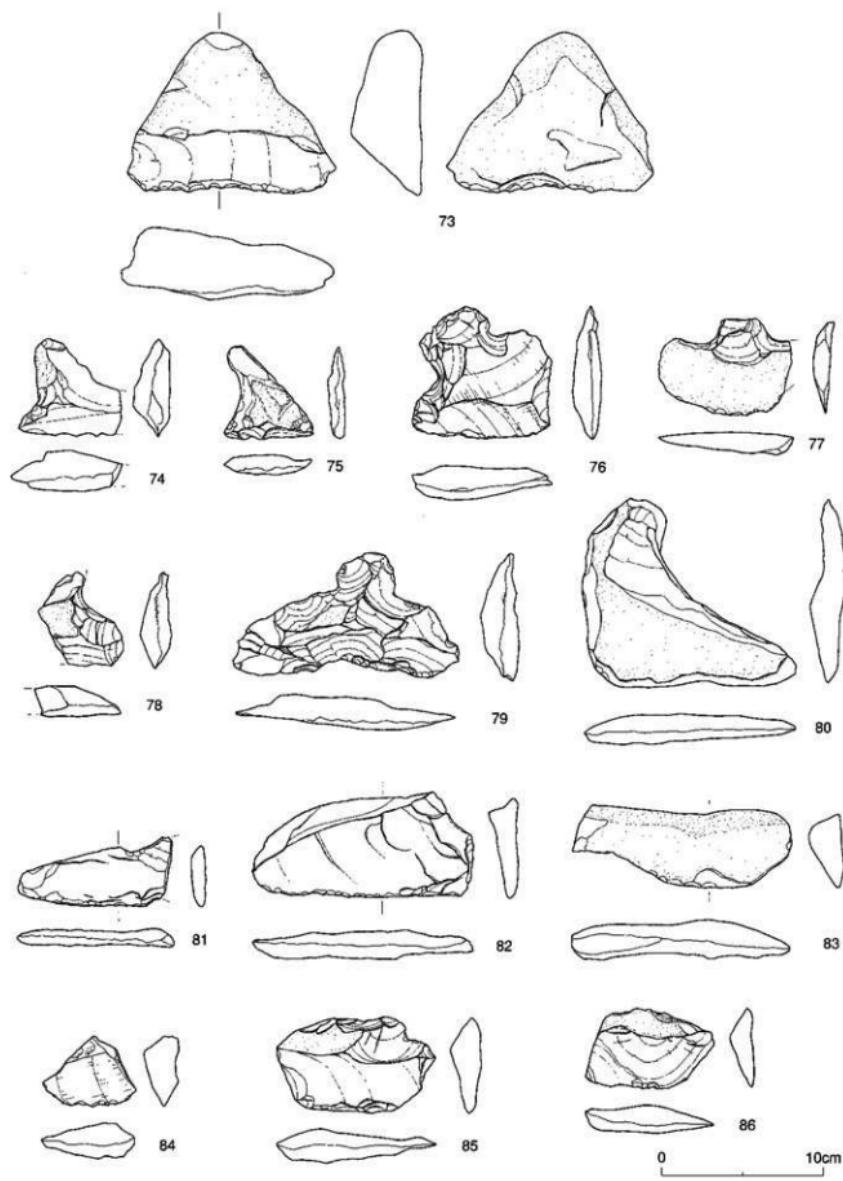
第20図 石器（打製石斧）



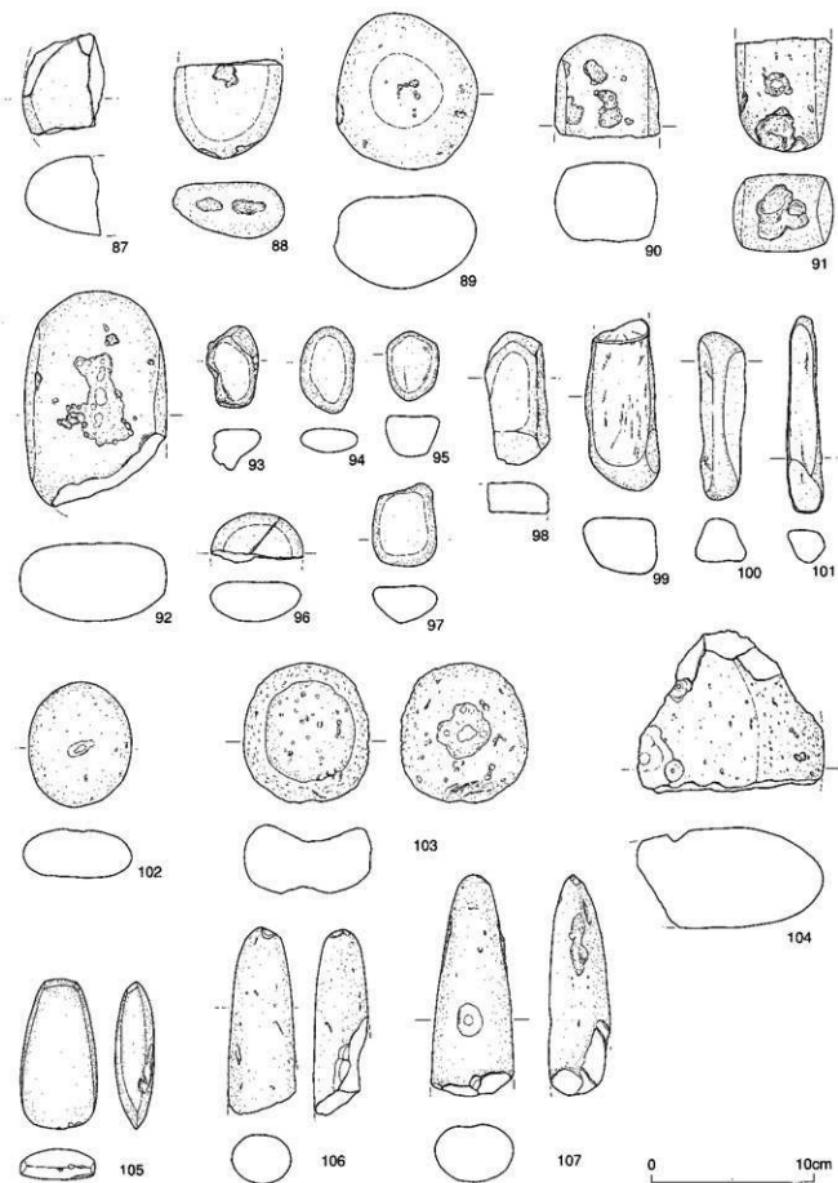
第21図 石器（打製石斧）



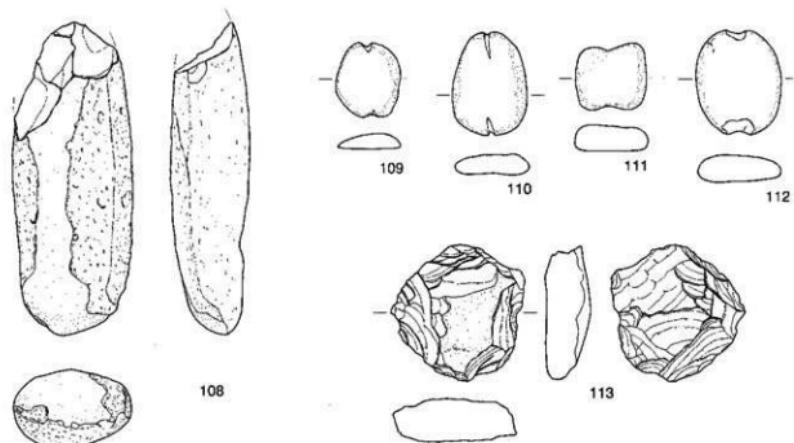
第22図 石器（打製石斧・櫛器）



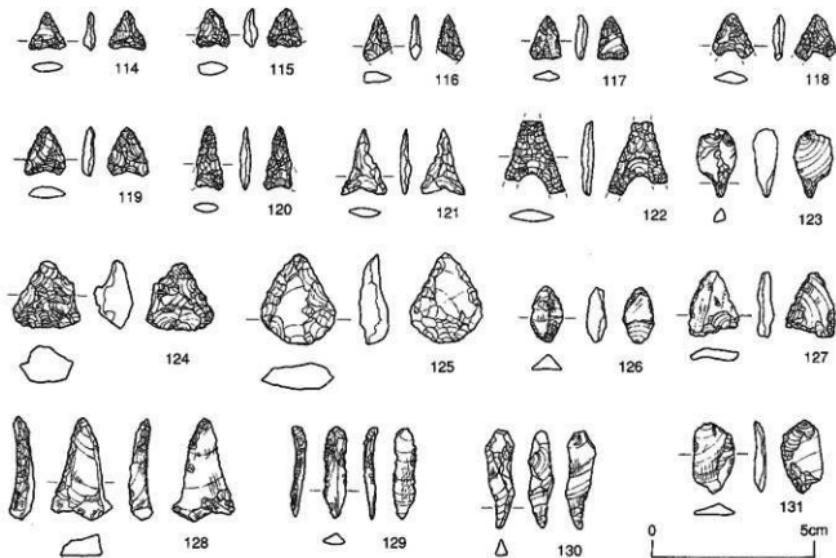
第23図 石器（擦器・石匙・横刃形石器）



第24図 石器（磨石類・石皿・磨製石斧）



第25図 石器（磨製石斧・石錐）



第26図 石器（石錐・加工痕のある剥片・石錐）

番号	出土地・層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	A-2区・Ⅲ層	打製石斧	8.3	3.7	1.3	58	砂岩	
2	B-2区・Ⅲ層	*	8.2	4.3	1.1	50	小	
3	C-3区・Ⅲ層	*	10.4	3.5	1.2	51	小	
4	C-3区・Ⅲ-N上層	*	7.5	3.7	1.1	47	小	破損
5	A-1区・Ⅲ層	*	9.6	4.1	0.6	32	砂岩	
6	*	*	10.7	4.0	1.7	91	砂岩	
7	A-1区・Ⅳ層	*	7.3	4.1	1.2	58	小	
8	A-2区・Ⅳ層	*	6.8	3.1	1.3	40	砂岩	
9	*	1柄	8.8	3.4	1.6	57	砂岩	破損
10	A-2区・Ⅳ層	*	5.2	3.2	1.3	30	砂岩	
11	2号住居・壁土	*	8.8	4.3	1.6	80	砂岩	
12	A-1区・Ⅴ層	*	4.5	4.7	1.7	51	小	
13	I層	*	5.9	4.6	1.6	31	小	破損
14	B-2区・Ⅲ層	*	5.6	4.5	0.9	31	小	
15	B-2区・Ⅲ層	*	8.0	6.4	2.3	128	砂岩	
16	*	1柄	8.6	5.5	1.8	120	小	破損
17	A-2区・Ⅲ層	*	11.3	5.6	1.5	141	砂岩	破損
18	*	1柄	10.3	4.9	1.6	113	砂岩	破損
19	A-2区・Ⅲ層	*	7.4	5.2	1.8	92	砂岩	破損
20	Ⅲ層	*	8.5	5.4	1.7	106	小	破損
21	B-2区・Ⅴ層	*	8.8	5.0	1.7	100	小	破損
22	B-2区・Ⅲ層	*	6.7	4.7	0.9	40	小	
23	不明	*	8.6	6.5	1.2	90	小	破損
24	A-2区・Ⅲ-N上層	*	10.3	5.5	2.8	169	砂岩	破損
25	A-2区・Ⅲ層	*	12.2	4.6	1.7	120	砂岩	破損
26	A-1区・Ⅲ層	*	9.8	5.1	2.3	130	鍍灰質砂岩	破損
27	*	1柄	11.0	5.5	1.7	110	小	破損
28	A-2区・Ⅲ層	*	8.4	5.1	1.5	82	小	破損
29	B-2区・Ⅲ層	*	7.0	5.3	2.1	111	砂岩	破損
30	A-2区・Ⅲ層	*	5.7	5.9	1.3	49	粘板岩	
31	B-2区・Ⅲ層	*	8.3	5.5	2.0	111	砂岩	破損
32	A-2区・Ⅲ層	*	10.0	5.5	2.6	158	泥砂岩(小)	破損
33	C-2区・Ⅲ-N上層	*	6.2	4.8	1.3	110	小	破損
34	A-2区・Ⅲ層	*	6.9	5.7	1.7	110	小	破損。刃部に磨耗痕。
35	A-2区・Ⅲ層	*	10.4	4.3	1.8	89	泥砂岩(小)	破損。刃部に磨耗痕。
36	A-1区・Ⅲ層	*	10.4	3.9	1.5	71	粗粒砂岩	
37	A-1区・Ⅲ層	*	8.5	5.3	1.7	94	砂岩	破損
38	B-1区・Ⅲ層	*	9.3	5.6	2.3	138	小	破損
39	B-2区・Ⅲ層	*	9.4	4.6	1.2	62	小	破損
40	B-3区・Ⅰ層	*	6.2	6.2	1.1	51	小	破損
41	A-1区・七号窓中A	*	7.8	5.0	1.3	60	粗粒砂岩	
42	A-2区・Ⅲ層	*	12.0	5.2	2.1	159	小	破損
43	I切	*	10.5	5.5	2.1	150	砂岩	破損
44	B-2区・Ⅲ層	*	14.1	4.6	1.3	79	小	
45	B-2区・Ⅳ層	*	11.4	4.8	1.6	100	小	
46	D-2~3区・I層	*	10.0	5.9	2.0	142	小	
47	B-1区・Ⅰ層	*	13.5	4.9	1.2	89	小	
48	D-2区・Ⅲ層	*	12.0	5.1	1.8	132	小	
49	A-2区・Ⅲ層	*	10.5	4.9	1.3	84	小	
50	A-2区・Ⅲ層	*	12.4	5.5	2.0	157	砂岩	破損。刃部に磨耗痕。
51	A-1区・Ⅲ層	*	12.7	5.3	1.8	162	小	
52	B-2区・Ⅲ層	*	10.3	4.7	2.0	113	砂岩	破損
53	A-2区・Ⅲ層	*	11.2	4.7	1.6	118	砂岩	
54	B-2区・Ⅲ層	*	8.3	4.3	1.7	64	砂岩	破損。刃部に磨耗痕。
55	A-1区・Ⅲ層	*	11.4	5.4	2.4	150	小	
56	D-2~3区・I層	*	9.5	7.6	2.1	130	小	
57	I号住居・炭土	*	10.9	5.9	2.8	250	小	
58	A-1区・Ⅲ層	*	12.6	5.6	1.6	123	砂岩	
59	A-1区・Ⅲ層	*	9.8	5.2	2.1	120	砂岩	
60	*	1柄	8.4	6.1	1.3	90	小	
61	A-1区・Ⅲ層	*	5.5	5.6	1.5	69	小	
62	D-2~3区・I層	*	10.0	5.9	1.7	111	小	破損
63	A-2区・Ⅲ層	*	7.8	5.7	2.3	102	粗粒砂岩	破損
64	A-2区・Ⅲ層	*	11.2	5.6	1.5	111	小	
65	A-3区・Ⅲ層	*	11.7	5.1	2.0	140	小	
66	A-1区・Ⅲ層	打製石斧	9.0	7.6	2.2	161	粗粒砂岩	破損

第2表 石器一覽表(1)

番号	出土区・層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
67	B-2区・Ⅲ層	*	6.4	7.7	2.2	148	ホルンフェルス	破損
68	A-2区・Ⅲ層	*	9.3	8.1	1.0	81	砂岩	
69	2号住居・壁上	*	9.5	7.8	3.8	322	泥岩	破損。中央部に擦耗痕。
70	B-1区・Ⅲ層	*	9.5	7.8	2.4	230	ホルンフェルス	
71	A-2区・Ⅲ-N上層	*	9.2	7.4	2.1	142	細粒砂岩	破損
72	B-2区・Ⅲ層	陶器	10.4	13.3	4.3	529	粗粒砂岩	
73	Ⅰ層	*	10.0	12.7	3.6	480	粗粒砂岩	
74	A-2区・Ⅲ-N上層	石器	6.0	6.4	2.4	75	ホルンフェルス	
75	Ⅰ層	*	5.7	5.3	1.1	28	ホルンフェルス	
76	A-1区・Ⅲ層	*	8.2	8.6	1.6	119	ホルンフェルス	
77	Cトレンチ	*	5.9	8.1	1.0	51	ホルンフェルス	
78	B-2区・Ⅲ層	*	5.8	4.9	2.0	47	砂岩	破損。つまみ抉入部に擦耗痕。
79	A-1区・Ⅲ層	*	7.2	13.8	2.0	145	砂岩	つまみ抉入部に擦耗痕。
80	A-1区・Ⅲ層	*	11.3	12.4	1.7	200	泥灰岩(ホ)	
81	B-2区・Ⅲ層	*	9.4	3.8	0.8	41	砂岩	破損
82	A-1区・Ⅲ層	横刃石刀	13.6	6.4	1.7	140	砂岩	
83	B-1区・Ⅲ層	*	13.3	4.9	2.1	182	花崗岩	
84	B-2区・Ⅲ層	*	5.9	4.3	2.1	42	ホルンフェルス	
85	B-2区・Ⅲ層	*	10.0	5.8	2.1	107	ホルンフェルス	
86	A-1区・Ⅲ層	*	7.2	4.8	1.5	56	泥岩	
87	B-3区・Ⅰ層	端石劍	5.7	4.7	5.0	231	端石	
88	Ⅰ層	*	5.8	7.0	3.4	217	花崗閃綠岩	破損。両面点状打痕、端部崩打痕。
89	Ⅰ層	*	10.0	8.9	5.8	715	石英閃綠岩	表面に点状打痕。
90	B-1区・Ⅲ層	*	6.4	6.5	4.8	316	花崗閃綠岩	破損。表面点状打痕、裏面V形凹。
91	A-1区・Ⅲ層	*	7.3	6.0	4.7	211	ヒン岩	破損。表面点状打痕、裏面V形凹。
92	B-2区・Ⅲ層	*	12.4	9.1	5.1	1018	花崗斑岩	破損。表面点状打痕。
93	A-1区・Ⅲ層	*	4.8	2.9	2.3	38	麻績質砂岩	
94	B-2区・Ⅲ層	*	5.1	3.4	1.5	38	麻績質砂岩	
95	B-3区・Ⅰ層	*	4.0	3.1	2.5	49	麻績質砂岩	
96	A-1区・Ⅲ層	*	3.1	5.7	2.3	51	麻績質砂岩	
97	A-1区・Ⅲ層	*	4.9	4.0	2.2	68	花崗閃綠岩	
98	B-2区・Ⅲ層	*	8.2	3.7	2.0	85	砂岩	
99	B-2区・Ⅲ層	*	10.6	4.6	3.7	249	端灰岩	表面に擦耗の擦痕。
100	A-1区・Ⅲ層	*	10.4	2.8	2.6	114	端灰質砂岩	
101	B-1区・Ⅲ層	*	12.2	2.2	1.8	60	端灰質砂岩	
102	A-1区・Ⅲ層	門石	7.7	6.6	3.0	202	安山岩	表面に点状打痕。表面に凹み。
103	A-1区・Ⅲ層	石皿	8.6	7.7	4.2	291	玄武岩	表面にV字形の凹み。
104	2号住居・覆土	*	10.3	11.5	6.5	990	玄武岩	破損
105	3号住居・覆土	磨製石斧	9.3	4.7	2.2	165	蛇紋岩	
106	B-2区・Ⅲ層	*	11.5	4.1	3.3	218	端灰岩	破損
107	Cトレンチ	*	13.7	5.0	3.5	364	泥岩	破損。片面に浅い凹み。
108	A-1区・Ⅲ層	*	19.3	7.4	4.7	1052	端灰岩	破損。木製品。
109	D-1トレンチ	石錐	4.5	3.9	0.9	25	板状岩	
110	小刀	*	6.3	4.5	1.3	56	ホルンフェルス	
111	A-2区・Ⅲ-N上層	*	4.1	4.4	1.7	51	砂岩	
112	A-1区・Ⅲ層	*	6.4	5.1	1.7	88	砂岩	
113	A-1区・Ⅲ層	加工痕ある剥片	8.4	7.9	2.7	220	砂岩	
114	Ⅰ層	石藻	1.2	1.2	0.4	0.2	墨壁	
115	D-2・3区・Ⅰ層	*	1.2	1.0	0.3	0.2	黒曜石	破損。
116	不明	*	1.4	0.9	0.4	0.2	*	破損。
117	不明	*	1.4	1.0	0.3	0.3	*	
118	Ⅰ層	*	1.4	1.3	0.3	0.1	*	破損。
119	不明	*	1.5	1.3	0.4	0.4	*	
120	A-2区・Ⅰ層	*	2.0	0.9	0.3	0.3	*	破損。
121	2号住居・覆土	*	2.0	1.4	0.4	0.4	チャート	
122	C-2区・Ⅰ-N層	*	2.3	1.8	0.4	0.8	墨壁石	破損。
123	不明	石錐	2.1	1.2	0.8	1.1	*	
124	A-2区・Ⅲ層	加工痕ある剥片	2.1	2.1	1.2	3.5	石錐未製品。	
125	2号住居・覆土	*	2.8	2.3	0.9	4.7	チャート	石錐未製品。
126	不明	*	1.7	1.0	0.6	0.6	黒曜石	
127	1号住居・覆土	*	2.1	1.6	0.4	1.0	*	
128	不明	*	3.2	1.9	0.7	2.3	*	
129	1号住居・覆土	*	2.9	6.7	0.3	0.5	*	
130	2号住居・覆土	*	3.1	6.9	0.8	1.3	*	
131	B-1区・Ⅲ層	*	2.3	1.3	0.4	0.7	*	

泥質砂岩……泥質砂岩　ホルンフェルス

第3表 石器一覧表(2)

## 第2節 古代

狭い調査区にもかかわらず竪穴住居址3軒、土坑4基が発見された。いずれも斜面地にあるが、調査地の大部分が近代以降の土木工事で破壊されていることを考慮すると、遺構の分布域がさらに広がっていた可能性がある。住居は、出土遺物から古墳時代末期から奈良時代にかけて営まれたものと考えられる。とくに2号・3号住居址は7世紀後半に位置付けられ、遺構の主軸や規模などから近い時期に営まれた可能性がある。土坑は出土遺物が無いため詳細は不明だが、覆土が住居と類似することから本節で扱うこととした。遺物は、遺構を中心として土師器・須恵器・灰釉陶器が出土したが、土師器が大半である。石器や金属製品は見つかっていない。

本遺跡で遺構が確認できたのはこれが初めてである。また、桂川流域における古墳時代末期から奈良時代の遺跡は調査例が少なく、律令制の成立から初期段階における当地の実像を知る貴重な事例と言える。以下、発見された遺構と遺物について説明する。

### (1) 竪穴住居址

#### 1号住居址（第27～29図・図版3～4）

**位置** 調査区南端のB-3区にあり、西壁は未調査区にかかる。北に隣接して3号住居址がある。試掘時に発見され、確認面は第Ⅲ層上面である。

**形状・規模** 竪穴は東壁3.5m、東西は調査部分で4.5mの平面長方形で、北壁にカマドを持つ。主軸方位はN-15°-Wである。壁高は斜面下方に向けて低くなり、東壁で最高70cmを測る。

**床** 第Ⅳ層下位から第V層中に構築され、カマド前面から周辺を結ぶ住居主軸を中心に堅く締まっている。貼り床は認められなかった。

#### 柱穴 認められなかった。

**周溝** カマド部分を除いて全周し、幅は約30～50cm・深さは約15cmであるが、カマド西側で幅が約1mに広がり、立ち上がりが緩やかになっている。

**土坑** カマドの前面で1基（A）、竪穴の北東側で1基（B）を検出した。Aは平面不整形で1.2m×1mの規模を測り、床面からの深さは約10cmである。Bは平面楕円形で1.2m×0.8mの規模を測り、床面からの深さは約14cmである。覆土はいずれも白色粘土粒や焼土粒・炭粒を含む暗褐色土を基調とし、底面で白色粘土塊が検出された。Aの粘土は一部焼土化している。遺物は、Bの覆土中で土師器の破片が4点、小砾が出土した。

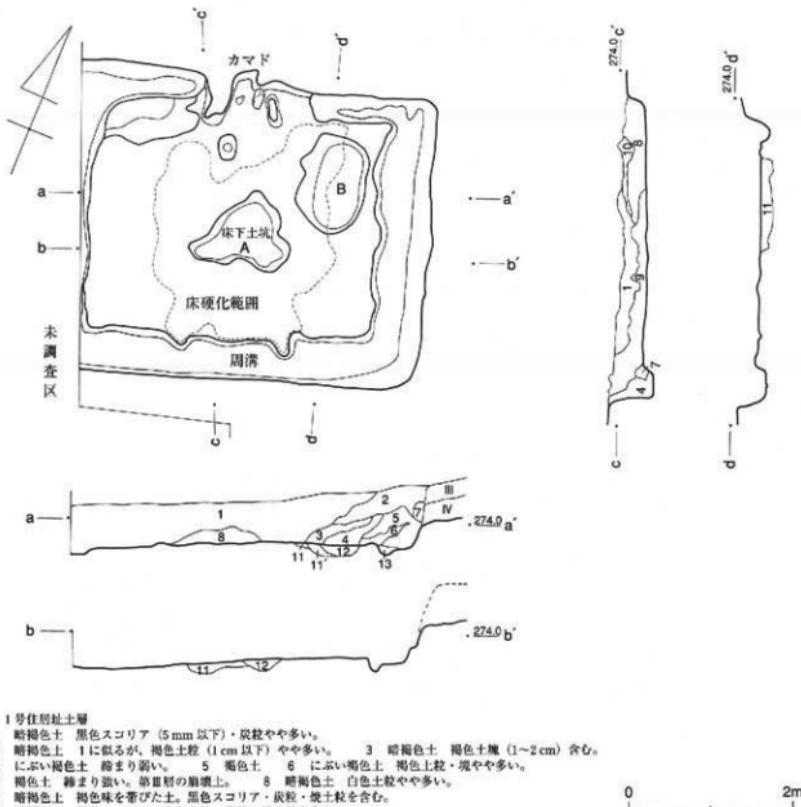
**カマド** 北壁中央にある。規模は、焚き口から煙道部先端まで75cm、両袖部の最大幅1m、焚き口の幅は約60cmである。壁をわずかに掘り込んで構築され、左袖部は地山の作り出しが認められる。天井部は遺存しない。袖部は白色粘土で構築され、右袖部には自然縛1個が補強材に使われていたが、周囲に同様の自然縛や白色粘土塊が散乱していることから、両袖部は一部破壊されているものと考えられる。

**火床部** は住居の床面を約10cm掘り込んで構築され、自然縛の支脚が煙道部寄りに直立状態で検出された。土器の破片が、火床の焼上面と直上の白色粘土を主体とした層から多数出土し、レベル差は数cm以内に収まる。

**小穴** が煙道部と左袖部の前面で各1基検出された。煙道部では最深80cm。左袖部側では深さ45cmで、内部に袖石に類似した自然縛1個（長さ25cm）が検出されており、カマド袖部の掘り方である可能性がある。

**覆土** 暗褐色土を主体とするが、東壁寄りに褐色土を主体とした土が複層して流れ込み、縄文土器の破片が多く含まれる。

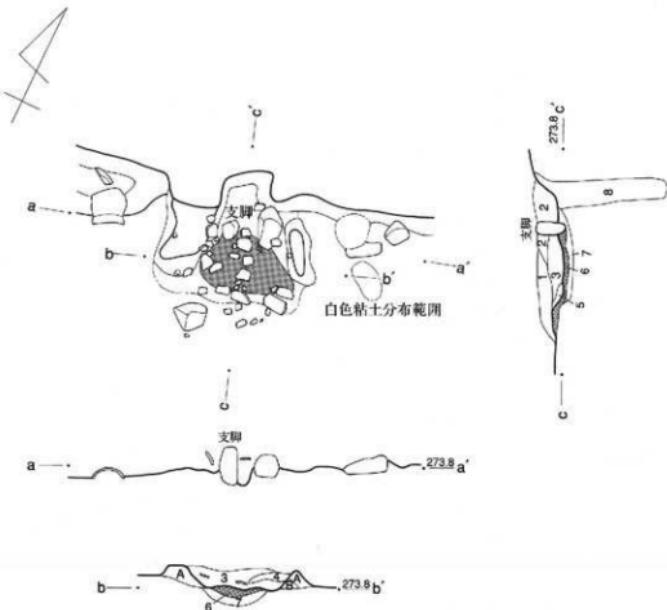
遺物（第29図・第4表・図版19） 出土遺物の多くは覆土中に含まれる。この中には縄文土器の破片が多数混在することから、覆土中の遺物の多くは周囲からの流れ込みによるものと考えられる。床面付近の出土遺物は土師器が主体である。カマド西側の床面レベルで壺（1）、甕（5）が出土した他、土坑Bの底面から甕（4）が出土した。カマド火床部から壺（2）、甕（5・6）、鉢（8）の破片が出土したが、いずれもカマドの周囲や壁際から出土した土器との接合関係が認められる。以上のうち、壺は内外面にヘラ磨きを施したもので、扁平に近い丸底のもの（1,2）や、身の深いもの（3）がある。甕は相模型で占められる。いずれも完形に復元できるものはない。この他、カマド火床部の土から微細な炭化種実を検出した。この種実同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果を付篇1に掲載した。



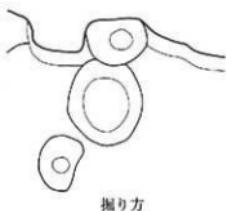
1号住居址土層

- 1 暗褐色土 黒色スコリア (5mm以下)・炭粒やや多い。
- 2 暗褐色土 1に似るが、褐色土粒 (1cm以下) やや多い。
- 3 暗褐色土 褐色土塊 (1~2cm) 含む。
- 4 にぶい褐色土 緩まり弱い。
- 5 褐色土 6 にぶい褐色土 褐色土粒・塊やや多い。
- 7 褐色土 緩まり強い。第Ⅲ層の崩壊上。
- 8 暗褐色土 白色土粒やや多い。
- 9 暗褐色土 褐色味を帯びた土。黑色スコリア・炭粒・炭土粒を含む。
- 10 暗褐色土 黒色スコリア・白色土粒・炭粒・炭土粒を含む。
- 11 暗褐色土 土坑覆土上。白色土粒・塊 (1~1.5cm)・炭粒・炭土粒多い。一部で堅く結まる (11')。
- 12 濃褐色土 やわらかい焼土。暗褐色土を含む。
- 13 暗褐色土 炭粒・褐色土粒を含む。

第27図 1号住居址 (1/60)



- 1号住居址カマド土層
- 1 暗褐色土 白色土粒・焼土粒やや多い。
  - 2 暗褐色土 焼土粒少量。
  - 3 暗褐色土 白色土粒・焼土粒多い。
  - 4 暗褐色土 粘性強い。白色土粒・焼土粒多い。
  - 5 焼土塊。
  - 6 橙色土・焼土。粘性・締まりなく、粒子粗い。触感はガサガサ。
  - 7 にぶい褐色土 粘性・締まりなく、粒子粗い。触感はガサガサ。
  - 8 暗褐色土 粘性・締まりない。
- A 白色粘土
- B 褐色土 白色土粒・炭粒・焼土粒を含む。



0 1m

第28図 1号住居址カマド (1/30)



第29図 1号住居址遺物分布図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

番号	種類	法量(cm)	器質	器形	整形技法		備考
					外面	内面	
1	土師 壺	口徑13.8 器高3.9	胎土 1 mm 以下の砂粒・石英・赤色粒子を含む。焼成 良 色調 橙色7.5 YR 7/6	扁平に近い丸底。	I.I縁ロクロ横撫で。底部ヘラ削り後、磨き。	口縁ロクロ横撫で。底部ヘラ磨き。	底部内外面に細かな剥離痕。II縁外面の一部吸炭。口縁1/3欠損。
2	土師 壺	口径 (15.0) 器高3.9	胎上 1 mm 以下の砂粒を含み、緻密。焼成 良 色調 外にぶい橙色5 YR 7/4 内 赤褐色10 YR 5/4	扁平に近い丸底。	口縁横撫で、底部ヘラ削り後、ヘラ磨き。	口縁横ヘラ磨き。底部ヘラ磨きによる放射状暗文。	II縁3/4欠損。
3	土師 壺		胎土 1 mm 以下の砂粒を含み、緻密。焼成 良 色調 橙色5 YR 6/6		縁ヘラ磨き	横ヘラ削き	口縁の一部残る。
4	土師 甕	口径 (23.0)	胎土 1 mm 以下の砂粒・金雲母、1~2 mm 大の赤色粒子。焼成 良 色調 橙色7.5 YR 7/6		I.I縁横撫で。	口縁横撫で、肩部ヘラ撫で。	口縁の一部残る。相模型。
5	土師 甕	口徑 (27.5) 現高26.5	胎上 2~3 mm 大の小石、1 mm 以下の砂粒・赤色粒子・金雲母。焼成 良 色調 橙色5 YR 6/6	球胴形	口縁横撫で。肩部瓶のハケ日後、一部撫で。ハケ日は繊かく不鮮明なため、一見すると撫で仕上げ。	口縁横撫で、肩部指による撫で。	底部、および全体の2/3欠損。 相模型。
6	土師 甕		胎土 1 mm 以下の砂粒・赤色粒子・金雲母。焼成 良 色調 外にぶい橙色7.5 YR 7/4 内 橙色5 YR 7/8	長胴形	肩部撫で。	肩部指による撫で。	相模型。
7	土師 鉢	口径 (17.5)	胎土 1~7 mm 大の小石・砂粒を多く含む。焼成 不良 色調 外にぶい褐色7.5 YR 5/4 内 橙色7.5 YR 6/6		I.I縁横撫で。肩部瓶ヘラ削り。	口縁横撫で。肩部ヘラ撫で。	外面タール状の黒色付着物。内面吸炭。
8	土師 鉢	底径5.0	胎土 1~7 mm 大の小石・砂粒を多く含む。焼成 不良 色調 にぶい褐色7.5 YR 5/4	全体にいびつな形。	肩部瓶ヘラ削り。底部に爪形の跡。底部は雑な撫でが複数残る。による凹凸がある。		7と同一個体の可能性がある。底部内面に吸炭・タール状黒色付着物。
9	焼成 粘土塊	長径4.8 短径3.2 厚み1.8 重量36 g	胎上 1~10 mm 大の小石・砂粒を含む。焼成 良 色調 浅黃橙色7.5 YR 8/3				

第4表 1号住居址出土遺物一覧表

## 2号住居址（第30～33図・図版5～6）

位置 C-1区。南西6mに3号住居址がある。確認面は第Ⅲ層上面である。

形状・規模 竪穴は東壁4.3m、北壁3.8mの平面長方形で、東壁にカマドを持つ。主軸方位はN-65°Eである。壁高は斜面下方に向かって低くなり、西壁は一部失われている。東壁で最高55cmを測る。

床 第Ⅳ層下位から第V層中に構築され、カマドの周囲から西壁を結ぶ住居主軸を中心に堅く締まっている。貼り床は認められなかった。

柱穴 認められなかった。

周溝 カマド部分と西壁際を除いて検出され、幅は約20～45cm・深さは約10cmである。

土坑 カマドの右側に1基を検出した。平面梢円形で94cm×80cmの規模を測り、床面からの深さは約12cmである。内部は小石を含む白色粘土が充填され、下層の一部は堅く焼上化している。内部に遺物は含まれない。覆土上面に焼上・炭化材片の集中範囲が認められ、直上にカマド天井石の一部が集積されていた。

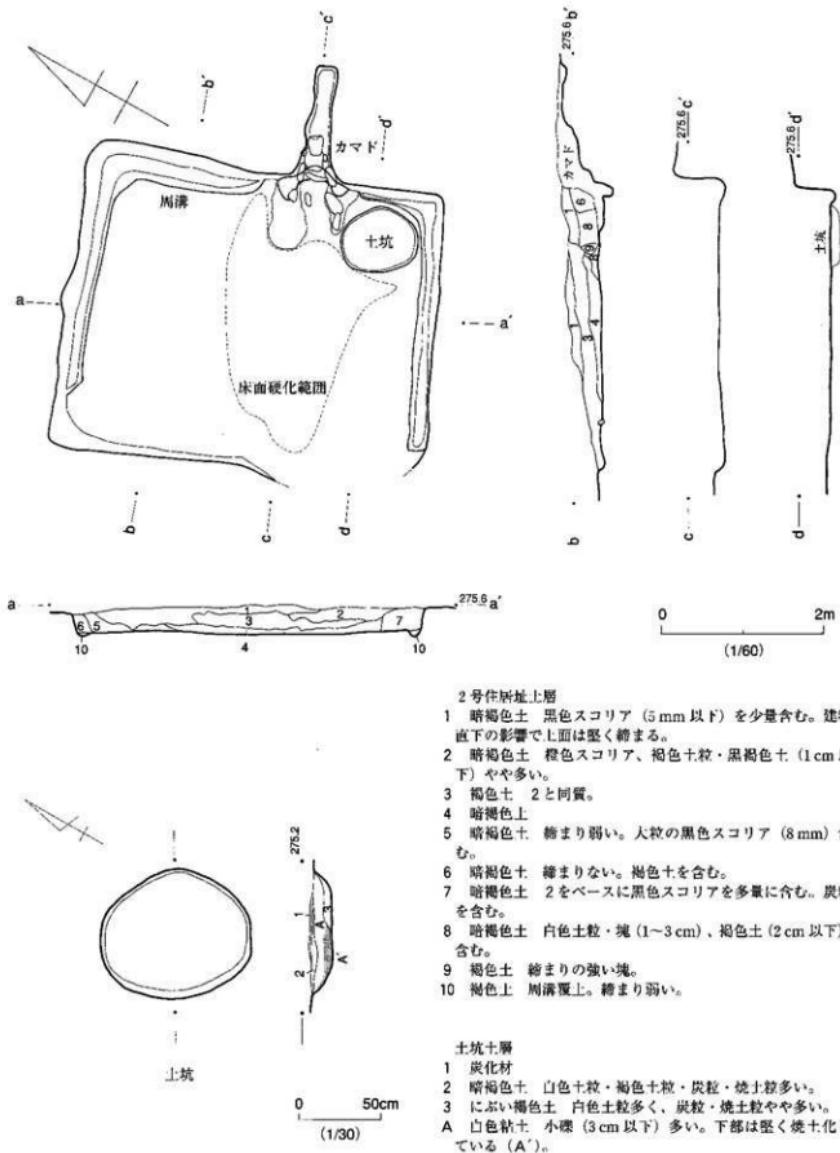
カマド 東壁の南寄りにある。規模は、焚き口から煙道部先端まで2.3m、両袖部の最大幅1m。焚き口の幅は約30cmである。壁を1.4m掘り込んで構築される。天井の一部と袖部が遺存し、白色粘土を主体に自然礫が補強材に使われていた。左袖の内面に補強の石はなかったが、下部に石を埋め込んだと思われる掘り方が見られたことから、引き抜かれた可能性がある。

煙道前面の天井部は堅い粘土で覆われ、この下部に、両袖石に架け渡した天井石と、底を欠いた長胴の転用甕が検出された。また、天井石の周囲には土器の破片が詰められていた。天井石は細長く扁平な泥質片岩で、この一部は煙道部側壁に用いられていた他、カマド右側の土坑上面にも集積されていた。のことから、カマドの構築後、石の一部が補修時の材料として粘土と共に保管されていた可能性が考えられる（第31図）。

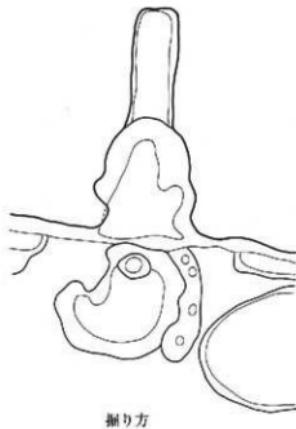
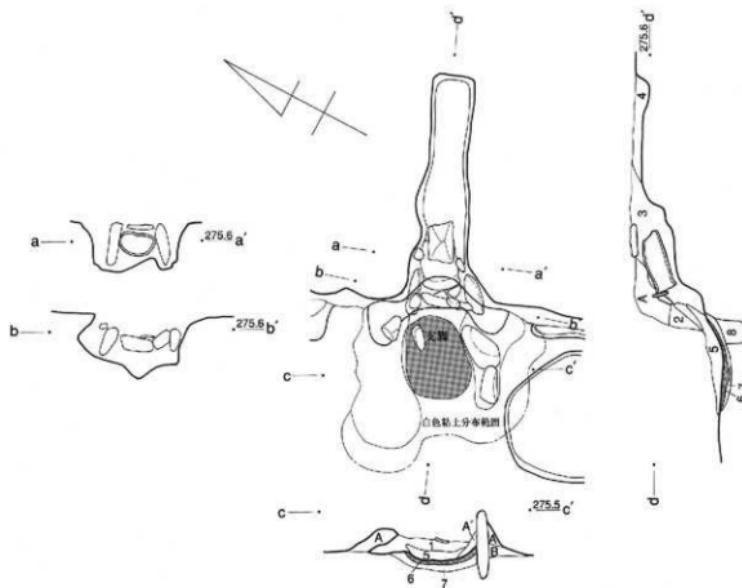
火床部は住居の床面を約10cm掘り込んで構築され、自然礫の支脚が煙道部寄りに直立状態で検出された。

覆土 本遺構は警察宿舎の建物直下に位置していたため、覆土上面は堅く締まっていた。暗褐色土を主体とするが、繩文土器の破片を含む褐色土が流れ込んでいる。

遺物（第33図・第5表・図版19～20） 土師器が主体である。壺は体部をヘラ削りした半球形のもの（1）と、ロクロ調整による小型のもの（2）がある。壺はヘラ削りによるもので占められ、胴部を縦に削る土器（4～7）と、斜・横削りする上器（8～11）に大別できる。後者の上器は、9を除き肩部が比較的薄く、とくに8は黒色塗彩が見られる。接合資料はカマド周囲に集中し、完形に復元できるものはなかった。以上の土器のうち、4は煙道部に転用され、9・10は天井石や袖石に密着していた破片同士が接合したもので、カマド構築の補助材に用いられたものであろう。このうち9の破片は、天井石と転用甕の間に詰められ、隙間を塞いでいた。5はカマド前の床面出土である。他の土器は、カマド周囲の覆土下層から出土している。この他、カマド覆土および火床部の土（6・7層）から、微細な炭化種実を多数検出した。この種実同定、およびカマド火床部と上坑覆土上面で検出された炭化材片の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果は付篇1に掲載した。

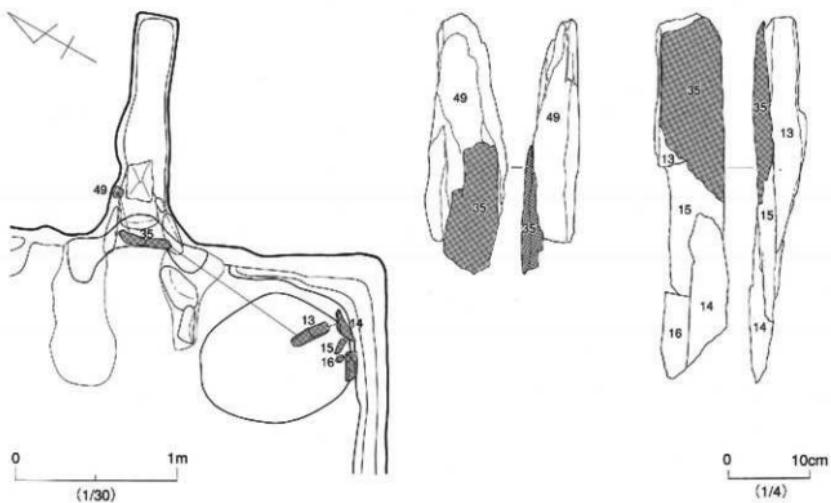
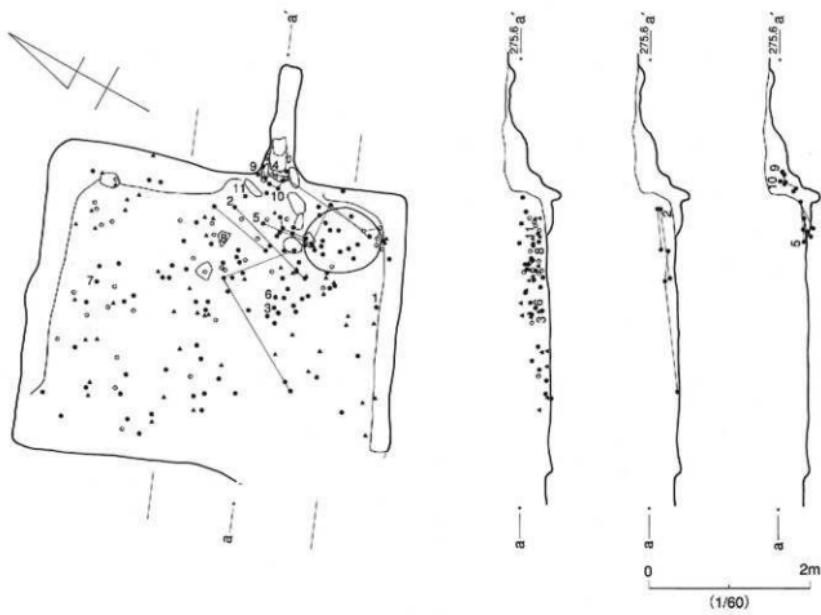


第30図 2号住居址・土坑

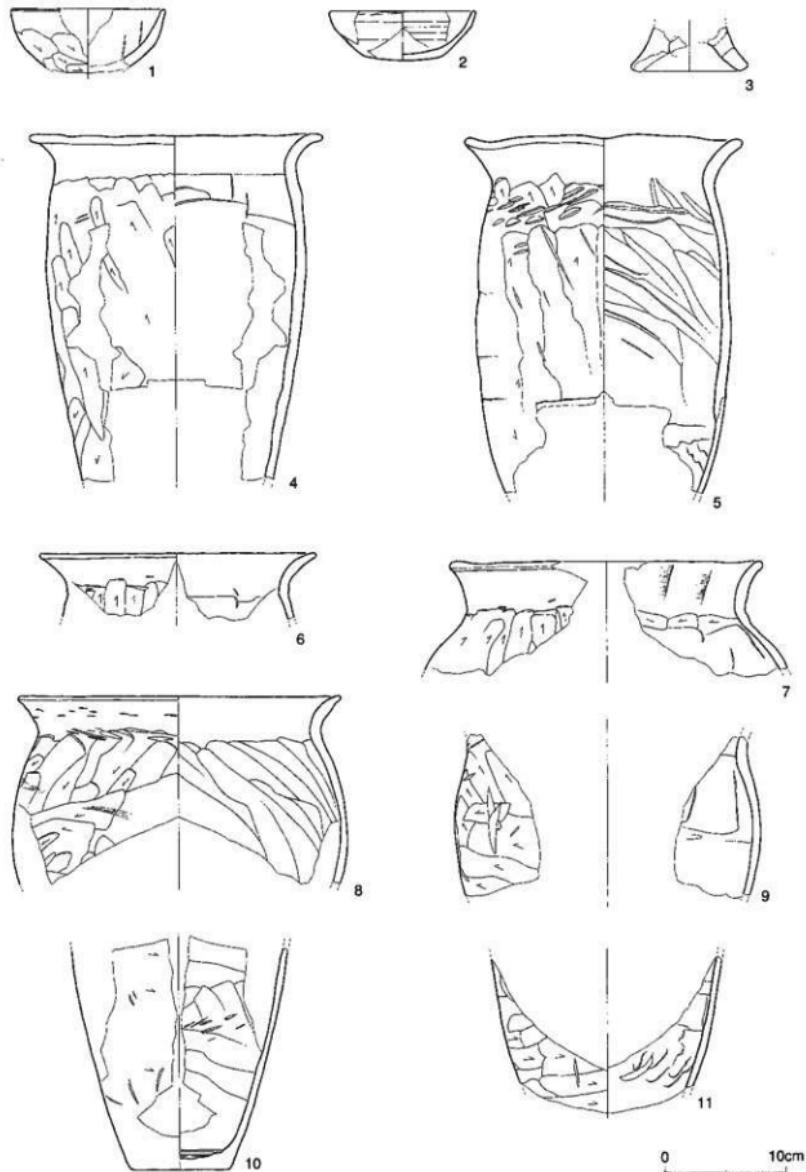


- 2号住居址カマド土層  
 1 にぶい褐色土 白色土粒・塊、焼土粒・塊多く、炭粒やや多い。  
 2 暗褐色土 白色土(2cm以下)多い。  
 3 暗褐色土 焼土粒多い。  
 4 褐色土 締まり強い。焼土粒を少量含む。  
 5 橙色土 白色土・焼土多い。  
 6 橙色土 やわらかい焼土。炭粒を含む。  
 7 褐色土 白色土粒・炭粒・焼土粒を含む。  
 8 褐色土 締まり弱い。  
 A 白色粘土 小謫(1cm以下)多い。天井部は堅く、一部は焼土化している(A')。  
 B にぶい褐色土

第31図 2号住居址カマド (1/30)



第32図 2号住居址遺物分布図(上)・礎接合状況(下)



第33图 2号住居址出土遗物 (1/4)

番号	種類	法量(cm)	器質	器形	整形技法		備考
					外面	内面	
1	土師 壺	口径(12.3) 現高5.2	胎土 1mm 以下の砂粒 を含む。焼成 良 色調 にぶい橙色5 YR 6/4	半球形の丸 底	口縁横拂で。体 部斜ヘラ削り。	口縁横拂で。体 部斜ヘラ削り。	
2	土師 壺	口径(11.8) 器高4.0	胎土 1mm 以下の砂 粒・石 英、2~3mm 大 の小石を含む。焼成 良 色調 橙色7.5 YR 7/6		口縁ロクロ横拂 で。底部回転ヘ ラ削り。	口縁ロクロ横拂 で。底部撫で。	
3	土師 壺	現高3.6	胎土 1mm 以下の砂 粒・黒雲母を含む。 焼成 良 色調 明褐色 7.5 YR 5/6	脚部の 2 箇 所に円孔。	手すくね。		脚の一部が残る。
4	土師 壺	口径23.5 現高28.5	胎土 1~3mm 大の砂 粒・小石、赤色粒子を含 む。焼成 良 色調 にぶい橙色5 YR 6/4	長胴形	口縁横拂で。胴 部斜ヘラ削り。	口縁横拂で。胴 部横ヘラ拂で。	カマ下燃道に転用。内 外面吸炭。胴下半部~ 底部欠損。
5	土師 壺	口径(22.0) 現高29.5	1~5mm 大の砂粒・小 石、赤色粒子を含む。 焼成 良 色調 外 橙色2.5 YR 6/6 内 にぶい橙色5 YR 6/4	長胴形	口縁横拂で。胴 部斜ヘラ削り。	口縁横拂で。胴 部横・斜めヘラ 拂で。	口唇部に吸炭。口縁~ 胴部の 1/2 残る。
6	土師 壺	口径(22.5)	胎土 2~3mm 大の小 石、1mm 以下の砂粒を 含み、硬質。焼成 良 色調 橙色2.5 YR 6/6	長胴形	口縁横拂で。胴 部斜ヘラ削り。	口縁横拂で。胴 部横ヘラ拂で。	外面に吸炭。
7	土師 壺	口径(25.0)	胎土 1~3mm 大の小 石・砂粒、赤色粒子を含 む。焼成 やや不良 色調 外にぶい褐色 7.5 YR 5/3 内 橙色5 YR 6/6	球胴形	口縁横拂で。胴 部斜ヘラ削り。	口縁横拂で。胴 部横ヘラ拂で。	外面に吸炭。
8	土師 壺	口径(26.0)	胎土 1mm 以下の砂粒 を含む。緻密で硬質。 焼成 やや不良 色調 にぶい黄橙色10 YR 6/3	球胴形	口縁横拂で。胴 部斜め、中位機 のヘラ削り。	口縁横拂で。胴 部斜めヘラ拂で。	口縁内外面に、黒彩が 断片的に残る。外面に 吸炭。
9	土師 壺		胎土 2mm 以下の砂 粒・金雲母を含む。 焼成 やや不良 色調 外にぶい黄橙色10 YR 6/3 内にぶい黄橙色 10 YR 7/2	長胴形と思 われる。	胴部斜めのヘラ 削り。	胴部横ヘラ拂で。	
10	土師 壺	底径8.0 現高19.2	胎土 1mm 以下の砂粒 を含み、緻密。焼成 良 色調 にぶい褐色7.5 YR 6/3	長胴形	胴部横・斜めの ヘラ削り後拂で。底 部ヘラ削り。	胴部横・斜めの ヘラ拂で。	外面に吸炭。
11	土師 壺		胎土 1mm 以下の砂粒 を含む。焼成 良 色調 にぶい黄橙色10 YR 7/4	長胴形	胴部横ヘラ削り	胴部横・斜めの ヘラ拂で。ヘラ 拂で付け。	

第5表 2号住居址出土遺物一覧表

3号住居址（第34～37図・図版7～8）

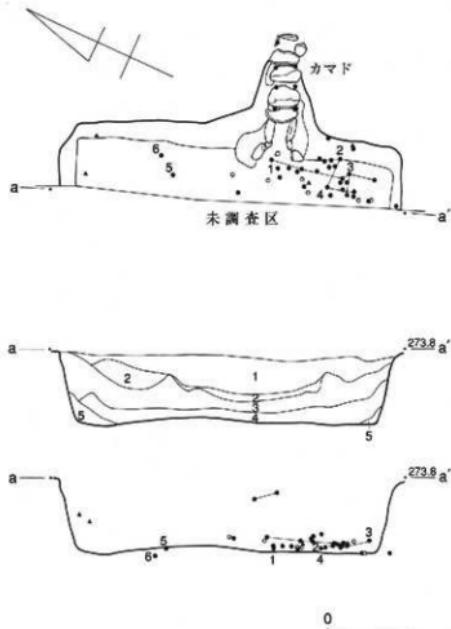
位置 C-3区。大半が未調査区にかかる。南に隣接して3号住居址がある。確認面は第Ⅲ層上面である。

形状・規模 突穴は東壁4.2mで、東壁にカマドを持つ。主軸方位は2号住居址とはほぼ同一である。壁高は、東壁で90cmを測る。

床 第Ⅳ層下位から第V層中に構築される。床に堅く縮まっている場所や、貼り床は認められなかった。柱穴・周溝・土坑は、認められなかった。

カマド 東壁の南寄りにある。規模は、焚き口から煙道部先端まで2m、両袖部の最大幅80cm、焚き口の幅は約40cmである。壁を1m掘り込んで構築される。カマドは、礫を基礎に白色粘土で構築され、天井の一部と袖部が遺存する。とくに煙道部は石組みが良く残っていた。煙道部の石組みは、まず側壁に平石を立て並べ、その上に天井石を架け渡した構造で、先端部は煙出しとなっている。また、天井石と側壁の石との間に土器の破片が詰められ、隙間を塞いでいた。石組みの被熱状況は第36図のとおりで、袖石および煙道の一部で被熱の痕跡が顕著に認められた。火床部は住居の床面を約10cm掘り込んで構築され、自然礫の支脚が煙道部寄りに直立状態で検出された。

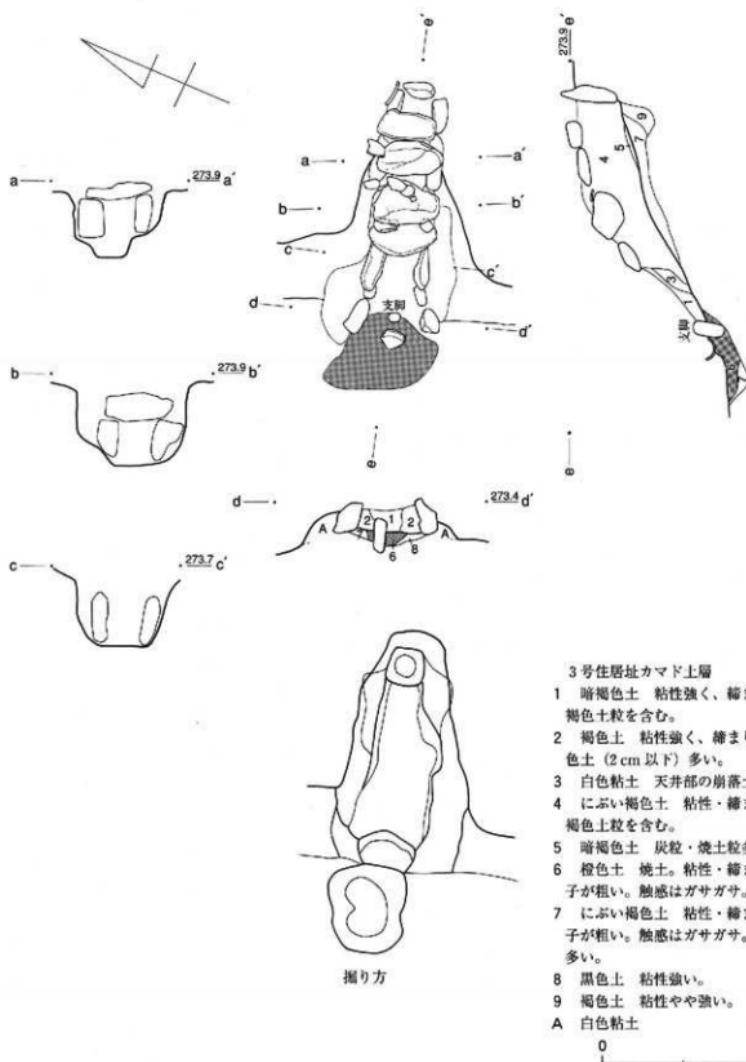
覆土 暗褐色土、褐色土。覆土最下層のカマド右側で焼土・炭化材片の集中範囲が認められた。



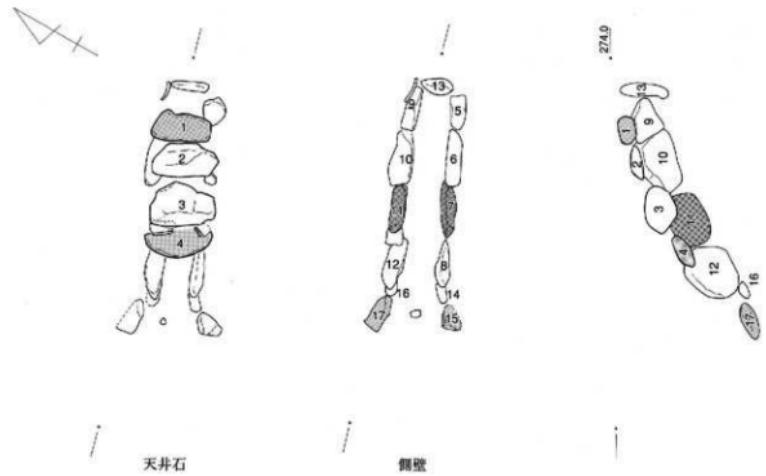
第34図 3号住居址・遺物分布図 (1/60)

3号住居址土層

- 1 暗褐色土 粘性強く、縮まり弱い。黒色スコリア (5mm以下) 含む。炭粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 黒色味を帯びた土。黒色スコリア・褐色土粒を含む。炭粒を少量含む。
- 3 にぶい褐色土 褐色土粒・塊(1～2cm)多い。黒色・橙色スコリア (5～7mm) を含む。
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土 縮まり弱い。



第35図 3号住居址カマド (1/30)



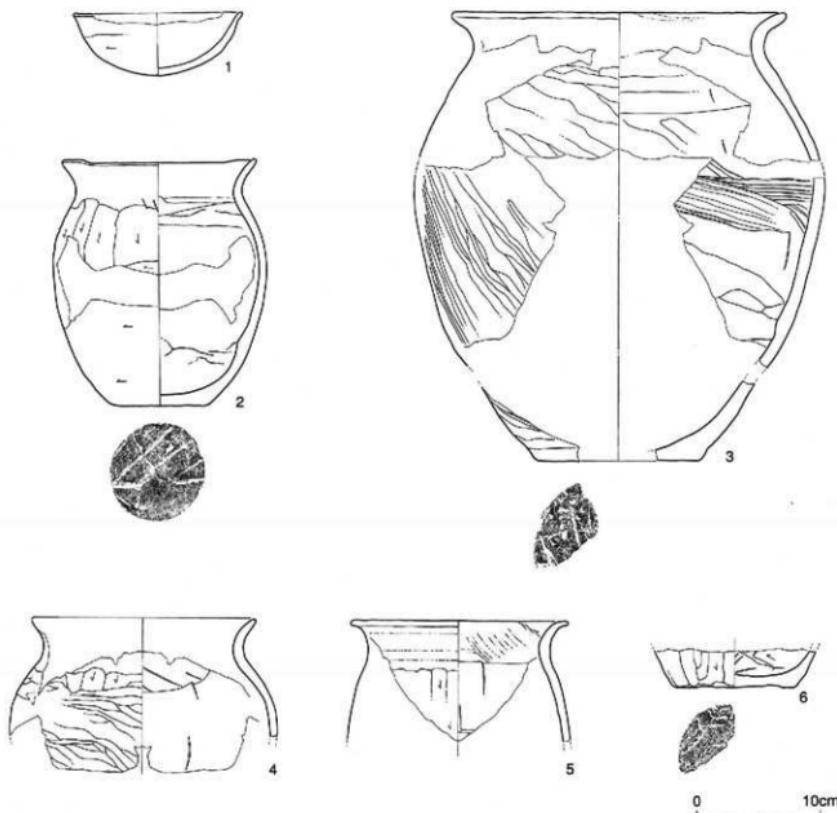
石の網かけ（スクリーントーン）は、被熱痕のあることを示し、  
濃淡は被熱の強弱を表す。

0 1m

番号	使用部位	進存度	重量 (kg)	被熱の状況 (空欄は明らかな被熱痕が認められないことを示す)
1	天井部	完形	11.2	内面が弱く赤化、吸炭。
2	タ	タ	11.5	
3	タ	タ	25.7	
4	タ	タ	8.5	内面が弱く赤化。
5	煙道部側壁	タ	7.6	
6	タ	タ	12.7	
7	タ	破損	14.0	内面が顯著に赤化し、一部吸炭。
8	タ	完形	13.0	
9	タ	タ	6.3	
10	タ	タ		
11	タ	破損	11.8	内面が顯著に赤化し、一部吸炭。
12	タ	完形	20.5	内面一部が弱く赤化。
13	奥壁	タ	8.4	
14	袖部側壁	破損	2.6	
15	タ	タ	4.7	一部が赤化。
16	タ	タ	0.6	
17	タ	タ	3.7	上部が赤化。

第36図 3号住居址カマド石被熱状況 (1/30)

遺物（第37図・第6表・図版20～21） 出土遺物は土師器が主体である。壺（1）はカマド火床面の出土で、底部ヘラ削りの半球形である。甕（2・3・4）はカマド右側でまとまって出土した。この出土層位は、覆土最下層中の焼土・炭化材片が集中した範囲の直上で、床面からは約5cm上に位置する。2はヘラ削りの小型甕、3・4はヘラ磨きの胴張り甕で、このうち3は、カマド石組の隙間を埋める破片と接合はしなかったものの同一個体と思われるもので、図上復元した。ヘラ削りの長胴甕（5・6）は床面出土。いずれも完形に復元できるものはない。この他、カマド火床部の土（6・7層）、およびカマド右側の覆土最下層の土から微細な炭化種実を検出した。この種実同定、およびカマド右側で検出された炭化材片の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果を付篇1に掲載した。



第37図 3号住居址出土遺物（1/4）

番号	種類	法量(cm)	器質	器形	整形技法		備考
					外面	内面	
1	上部 壺	口径(13.4) 現高 5.1	胎土 1~3 mm 大の小石・砂粒、赤色粒子を含む。焼成 良 色調 橙色 5 YR 7/6	半球形の丸底。	口縁横撫で。底部ヘラ削り。	口縁横撫で。底部ヘラ撫で。	口縁の一部と体部 1/2 が残る。
2	土部 壺	口径16.0 器高20.0 底径 7.7	胎土 1~7 mm 大の小石・砂粒、赤色粒子を含む。焼成 やや不良 色調 にぶい褐色 7.5 YR 5/4	小梨型。	口縁横撫で。胴部上半部横ヘラ削り、下半部横ヘラ削り。底部木葉痕。	口縁横撫で。胴部ヘラ撫で。	口縁~胴部の 1/3 を欠損。内外面の一部に吸炭。内面にタール状黒色付着物。
3	上部 壺	口径(27.0) 器高(約36.0) 底径(13.0)	胎土 軟質で、1~5 mm 大の小石・赤色粒子、1 mm 以下の砂粒・金雲母を含む。焼成 やや不良 色調 にぶい褐色 7.5 YR 5/4	球胴形	口縁横撫で。胴部、横・斜めのヘラ磨き。底部木葉痕。	口縁横撫で。胴部、横・斜めのヘラ撫で。	口縁~胴部の外面に、黒彩が断片的に残る。
4	上部 壺		胎土 1~5 mm 大の小石・砂粒、石英、赤色粒子を含む。 焼成 やや不良 色調 にぶい褐色 7.5 YR 5/4	球胴形	口縁横撫で。胴部、横ヘラ削り後、横ヘラ磨き。	口縁横撫で。胴部、横ヘラ撫で。	口縁外面に、黒彩が断片的に残る。胴部内面に吸炭。
5	上部 壺	口径(17.3)	胎土 1~2 mm 大の小石・砂粒、赤色粒子を含む。焼成 良 色調 橙色 7.5 YR 7/6	長胴形	口縁横撫で。胴部、横ヘラ削り。	口縁横撫で。胴部、横ヘラ撫で。	胴部内面にタール状黒色付着物。
6	土部 壺	底径(9.8)	胎土 1~4 mm 大の小石・砂粒、1 mm 以下の金雲母を含む。焼成 良 色調 橙色 7.5 YR 6/6	長胴形と思われる。	胴部横ヘラ削り。底部木葉痕。	内面ヘラ撫で。	外面に吸炭。

第6表 3号住居址出土遺物一覧表

## (2) 土 坑

4基発見された。確認面は第Ⅲ層上面である。平面は円形を基調とし底面は平坦になっている。覆土は暗褐色土の表層で、黒色スコリア・褐色土粒を多く含む。出土遺物はなかった。

### 1号土坑（第38図・図版9）

B-1区。試掘時に発見された。平面円形で、規模は径120cm・深さ40cm。

### 2号土坑（第38図・図版9）

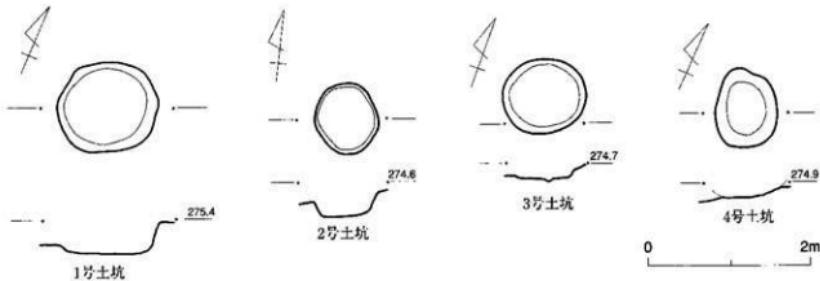
A-2区。平面円形で、規模は86cm×80cm・深さ30cm。

### 3号土坑（第38図・図版10）

A-2区。平面円形で、規模は105cm×100cm・深さ10cm。植物根による搅乱を受けている。

### 4号土坑（第38図・図版10）

C-2区。平面橢円形で、規模は100cm×80cm・深さ10cm。植物根による搅乱を受けている。



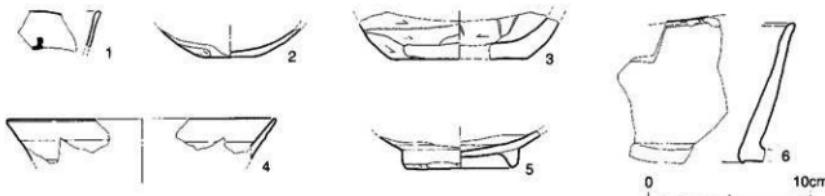
第38図 土坑 (1/60)

## (3) 遺構外出土遺物 (図版21)

1. 土師器壺。C-2区I～II層。口縁部外側に墨痕がある。2. 土師器壺。出土区不明。体部下半横ヘラ削り、底部ヘラ削り。3. 土師器甕。出土区不明。胴部下半横ヘラ削り、底部ヘラ削り。内面ヘラ撫で。

4. 須恵器壺。A-1区。口縁の一部。5. 灰釉陶器・高台付き碗。C-2区I～II層。底部1/2が残る。

6. 灰釉陶器・横瓶。C-2区I～II層。口頭の一部が残る。以上の大半は平安時代に比定される。



第39図 遺構外出土遺物 (1/3)

## 第V章　まとめ

**縄文時代** 斜面地で多数の土器・石器が出土した。同じ状況は隣接地区の第Ⅰ次調査でも確認されており(1993)、総合するとつぎのような特徴が指摘できる。①遺物の分布範囲が斜面地を帯状に取り巻く。造構はない。②出土遺物は、土器・石器・土製品(土偶・ミニチュア土器・土製円盤・土笛状土製品)、焼成不良の土器、石器の未製品、焼成粘土塊など多種多様で、これらが混在して出土する。土器・石器は多量である。③遺物の時期は早期末から後期中葉にわたるが、主体は中期である。④遺物は第Ⅲ層を中心に第Ⅳ層にかけて出土し、層位による時期差は認められない。⑤土器の大半が破片で、接合しない。⑥上器の完形品はないが、完形に近い1個体ないし2個体が同一地点に面まって出土する。以上の諸特徴から、調査地がいわゆる「土器捨て場」であったものと考えられ、近隣に定住的な集落が想定できる。集落の位置は推測の域を出ないが、校舎裏側で完形の注口土器が出土している(付篇2参照)ことから、調査地の東辺から上段の校庭付近に求められる。

**古代** 斜面地で堅穴住居址3軒、上坑4基が発見され、本遺跡では造構の初例となる。住居の時期は、出土遺物から古墳時代末期~奈良時代前半に比定され、少なくとも2期にわたる変遷が考えられる。

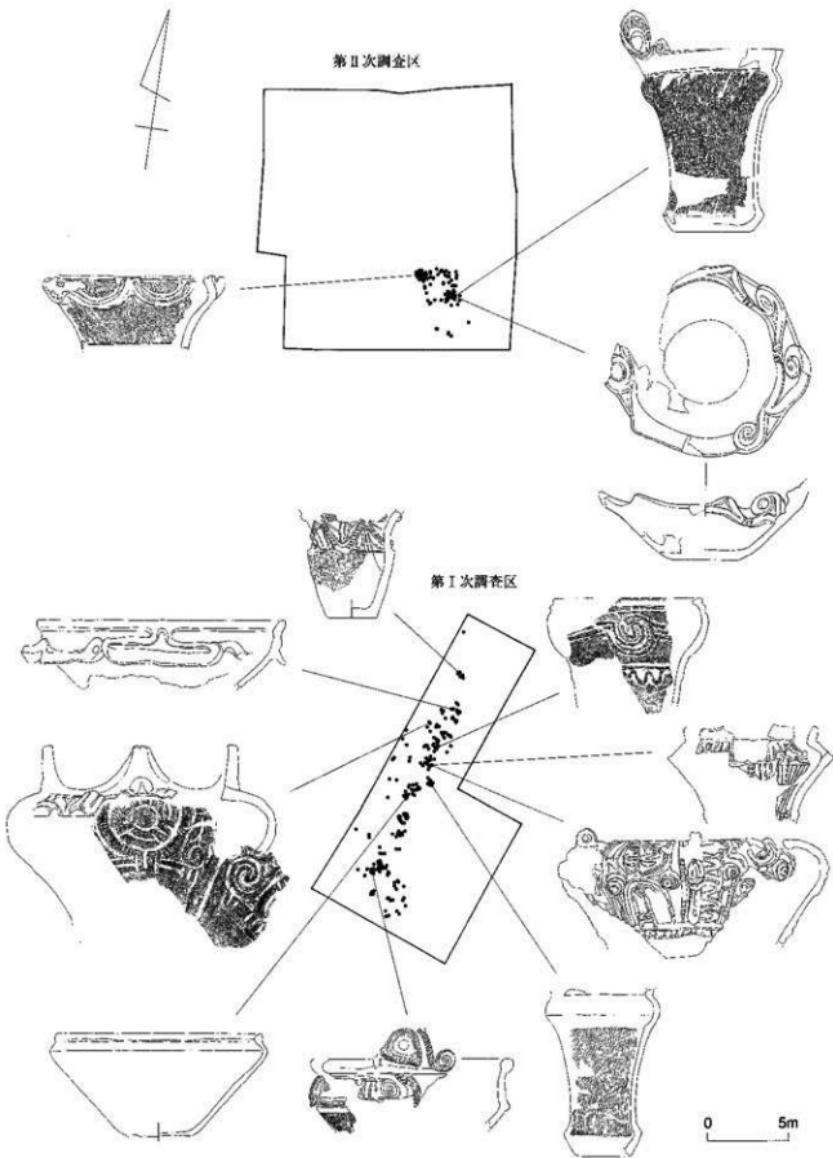
第1期は7世紀後半で、2号・3号住居が該当する。いずれも東カマドで、住居の主軸や規模はほぼ一致する。カマドは基本的に自然石と粘土によって構築され、土器片が補助材に用いられる。煙道部が長く、2号住居には長胴甕が転用され、3号住居は石組みが良く残っていた。2号住居は床下粘土土坑を伴う。遺物は土師器の壺・甕・高杯で、鬼高系である。壺は体部ヘラ削りの半球形が主体で、ロクロ整形のものが加わる。甕は長胴形・球胴ないしは胴張形・小型があり、ヘラ削りが多用されるが、球胴甕の一部はヘラ磨きで仕上げられる。甕には在地的な系統に加え、他地域の系統と思われる斜・横削り整形の土器群が含まれる。高杯は短脚で円孔がある。なお、2号住居のカマド内から、アワあるいはヒエの炭化種実が検出された。

第2期は8世紀前半で、1号住居が該当する。住居の主軸が第1期に比べ直角に傾き、北カマドとなる。カマドは自然石と粘土により構築されるが、袖石が引き抜かれ、粘土や土器の破片によって火床部が覆われた状態であった。カマドを封鎖する祭祀行為の一種であるかもしれない。カマド周囲に床下粘土土坑を伴う。遺物は土師器の壺・甕・鉢がある。壺は扁平に近い丸底や身の深いものがあり、内外面にヘラ磨きを施している。このうち内面に放射状暗文を施した壺は、精選された胎土で丁寧な作りである。甕は相模型で占められ、器形は長胴形・胴張形で、撫で仕上げだが一部の土器に刷毛目が残る。鉢はヘラ削りで粗雑な作りである。

第1期から2期を通じて、住居に柱穴や貼り床は認められていない。また、両期に見られる床下粘土土坑は、隣接する神奈川県方面で多数の事例が報告され、おもに奈良・平安時代の堅穴住居内にあって、カマド用粘土継りを目的とした施設と捉えられている。今回確認された土坑内の一部焼土化した粘土や石の集積は、カマドの改築・補修時の廃材であると同時に今後の補修に備えたものであった可能性がある。以上、造構や遺物は甲斐よりも相模的な要素が強いものであった。これは、上野原町周辺が甲斐国都留郡に編入されていく初期の過程では、地理的な要因によって、その文化圏が相模的であったという従来の指摘を裏付けるものと考えたい。

### 参考文献

- 山形真理子「土器すべての研究」「駿遊堂Ⅱ」山梨県教育委員会 1987  
上野原町教育委員会「上野原小学校遺跡」上野原町埋蔵文化財調査報告書6 1993  
堤 隆「甕の発達プロセスとその意味」「山梨県考古学誌7」1995  
大上周三「床下粘土土坑について」「神奈川考古22」1986  
坂本美夫ほか「甲斐地域」「神奈川考古14 シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題」1983



第40図 繩文土器の分布図

## 付篇1 上野原小学校遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに 上野原小学校遺跡では、古墳末～奈良時代の遺構が検出された。このうち、3軒の竪穴住居跡では、カマド内から種実遺体や炭化材が出土している。炭化材は燃料材、種実遺体は食物残渣や燃料材の一部などと考えられる。本報告では、これらの炭化材や種実遺体について同定を行い、植物利用に関する資料を得る。

### 1. 種実遺体の種類

#### (1) 試料

試料は、古墳時代末～奈良時代の竪穴住居跡から出土した種実遺体18点（試料番号1～18）である。いずれも炭化した微細片である。各試料の詳細は、同定結果と共に表1に記した。

#### (2) 方法

双眼実体顕微鏡で、その形態的特徴から種類を同定する。

#### (3) 結果

結果を表1に示す。18点のうち、同定できたものは試料番号7のみである。他は微細な炭化物で、同定不能であった。試料番号7は、炭化した胚乳で、大きさは1mm程度。ほぼ球形である。胚乳の跡が一部欠如しているように見える。このような形状から考えると、エノコログサ属のアワか、もしくはヒエ属のヒエ（*Setaria italica Beauv.-Echinochloa crus-galli Beauv.*）のいずれかであると考えられる。

#### (4) 考察

試料は、2号住のカマド火床部から出土した1点を除いて全て不明であった。同定できた1点はアワかヒエに同定された。大きさから考えて、栽培種である可能性が高いが、保存が悪く、頗も残っていないことから、詳細な検討は難しい。

カマドから出土していることを考えると、煮炊を行った容器からカマド内に落ちたことや、脱穀後の薫などを燃料材として用いた際に付着していたことなどが考えられる。今後、カマド内の灰像分析も行い、葉部の珪酸体列が検出されるか否かについても検討したい。

### 2. 炭化材の樹種

#### (1) 試料

試料は、古墳時代末の竪穴住居跡から出土した炭化材3点（試料番号19～21）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表2に記した。

#### (2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接続断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### (3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。

表1 種実同定結果

番号	遺構名	試料名	種類名
1	1号住	カマド火床部	不能
2	2号住	カマド覆土	不能
3	2号住	カマド覆土	不能
4	2号住	カマド覆土	不能
5	2号住	カマド火床部	不能
6	2号住	カマド火床部	不能
7	2号住	カマド火床部	アワ or ヒエ
8	2号住	カマド火床部	不能
9	2号住	カマド覆土	不能
10	2号住	カマド覆土	不能
11	2号住	カマド覆土	不能
12	2号住	カマド鍋床面	不能
13	3号住	カマド火床部焼上	不能
14	3号住	カマド火床部焼上	不能
15	3号住	カマド火床部7層	小能
16	3号住	カマド火床部7層	不能
17	3号住	カマド鍋床面	小能
18	3号住	カマド鍋床面	小能

試料番号19には2種類が認められた。これらの炭化材は、針葉樹1種類（モミ属）、広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に示す。

#### ・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~20細胞高。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔眼部は1~2列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

#### ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。

#### (4) 考察

2号住から出土した炭化材のうち、試料番号19はカマド火床部から出土しており、燃料材の一部が残存した可能性がある。一方、試料番号20と21は、カマド脇の床面から出土しており、住居構築材等に由来している可能性がある。

山梨県では、長坂町健康村遺跡で平安時代の住居構築材について樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994）。その結果では、クヌギ節を中心とした種類構成が認められており、3号住（試料番号21）の結果と一致する。関東地方で行われた調査例では、古墳~平安時代の住居構築材は、クヌギ節・コナラ節・クリなどが多く利用されている（高橋・植木、1994）。これらの結果から、本遺跡でも住居構築材にクヌギ節などが利用されていたことが推定される。2号住ではモミ属が出上しており、2号住とは種類が異なる。住居構築材は、住居の形態や用途などによって用材選択が異なることが指摘されている（橋本ほか、1996）。しかし、今回の結果については、調査地点が少ないため詳細は不明である。

一方、2号住のカマドから出土した炭化材はクヌギ節とアカガシ亜属であった。いずれも薪炭材として優良な木材とされる（平井、1979）。このことから、燃料材として優良な堅い木材を選択して利用していたことが推定される。このうち、クヌギ節は住居構築材としても確認されている。このことから、燃料材には枝などが利用されたことが推定される。また、堅い木材は燃え残りやすいことから、他にも燃料材として利用された種類があったことが推定されている。とくに、堅い木材に火を付けるために、燃えやすい草木類なども利用されていたことが推定される。

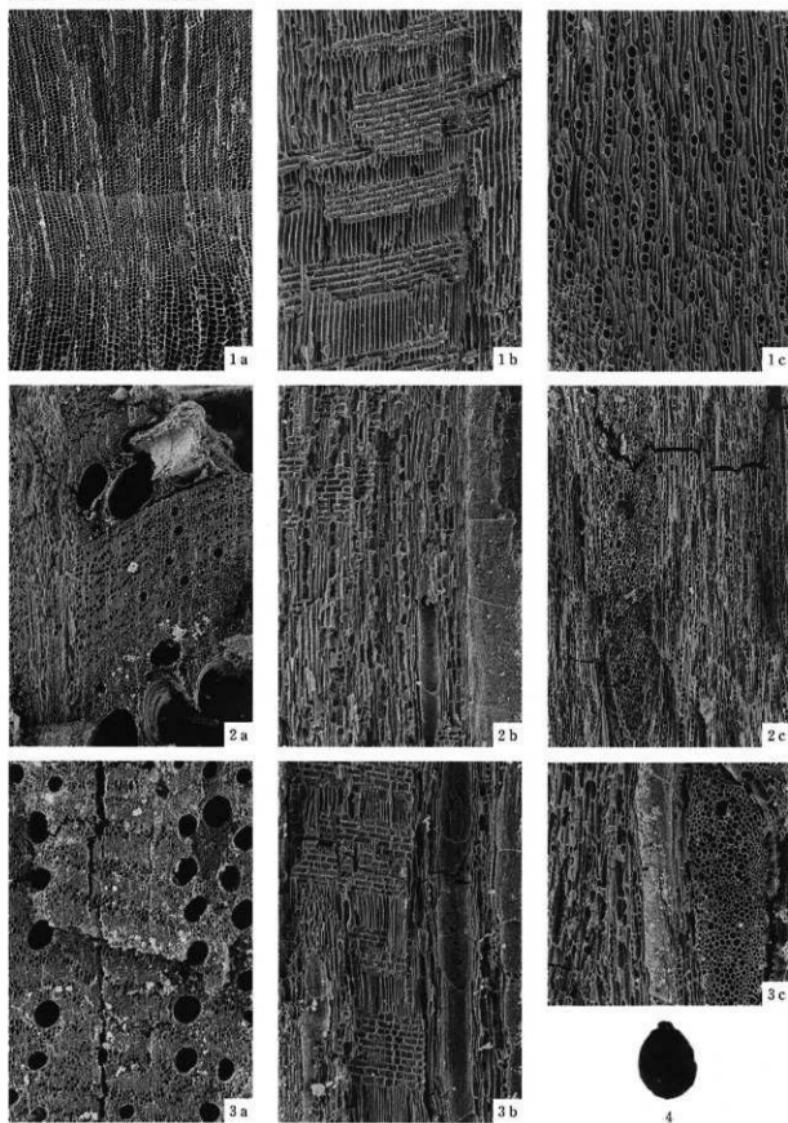
#### 引用文献

- 橋本真紀夫・高橋 敦・大塚昌彦（1996）群馬県榛名山東麓地域における绳文時代から平安時代の住居構築材の用途。日本文化財科学会第13回年会研究発表要旨集、p. 92~93。
- 平井信二（1979）木の事典 第2巻、かなえ書房。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告書、「山梨県北巨摩郡長坂町 健康村遺跡-（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書-」、p. 116~128、新宿区民健康村遺跡調査団。
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定から見た住居構築材の用途選択。PALYNO, 2, p. 5~18、パリノ・サーヴェイ株式会社

表2 炭化材の樹種同定結果

番号	遺構名	採取位置	時代	樹種
19	2号住	カマド火床部	古墳時代末	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				コナラ属アカガシ亜属
20	2号住	カマド脇床面	古墳時代末	モミ属
21	3号住	カマド脇床面	古墳時代末	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

図版1 炭化材・種実遺体



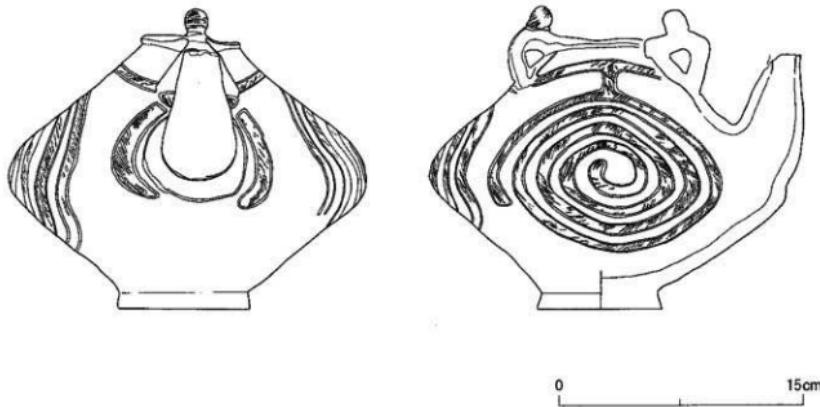
1. モミ属 (試料番号20) a: 木口, b: 板目, c: 板目
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号21) a: 木口, b: 板目, c: 板目
3. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号19) a: 木口, b: 板目, c: 板目
4. ヒエまたはアワ (試料番号7)

— 200  $\mu\text{m}$  : a  
— 200  $\mu\text{m}$  : b, c  
— 1.0 mm : 4

## 付篇2 上野原小学校出土の縄文式土器

昭和40年頃、上野原小学校の生徒だった安藤隆氏が、同校の敷地内にある校舎裏の土手を掘ったところ、縄文式土器を発見した。土器は、都留市の奥隆行氏によって完形に復元され、その後に刊行された上野原町誌（1975）に巻頭カラー写真で掲載されている。所有者は安藤隆氏である。以下、土器について説明する。

**注口土器（図版21）** 底部1/2を欠くが、ほぼ完形である。高さ18.5cm・口径4.7cm・胴部最大径22.0cm・底径7.6cm。胴部中位が強く張り出した器形で、注口部は直立する。口縁部に1対の橋状把手を配し、把手頂部に球状の小突起を付ける。底部は高さ1cmの高台で、底面中央部には不鮮明な網代痕が残る。文様は、胴部に平行沈線による渦巻文を配し、無節縄文を粗く充填する。把手の小突起にも縄文が施される。器面は黒色を呈し、胎土に2mm以下の金雲母が含まれる。縄文後期・堀之内2式に比定される。



第41図 注口土器 (1/3)

# 図 版

図版1



調査前全景



試掘調査状況

図版2



調査区土層断面



住居址検出状況

図版3



1号住居址



1号住居址カマド



1号住居址土坑B



カマド火床部遺物出土状況



壺(2) 出土状況



壺(1)・甕(5) 出土状況



甕(5) 出土状況

図版5



2号住居址



2号住居址カマド検出状況



2号住居址カマド煙道部



2号住居址遺物出土状況

図版7



3号住居址



3号住居址カマド

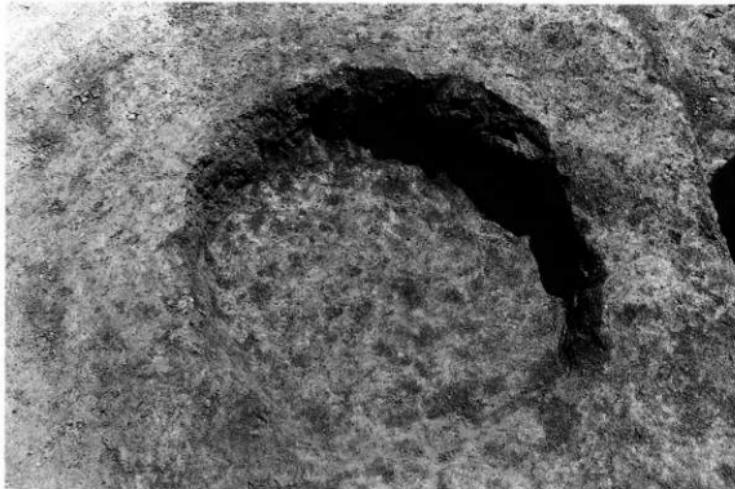


3号住居址カマド煙道部検出状況  
天井石(3)を取り除いた状況

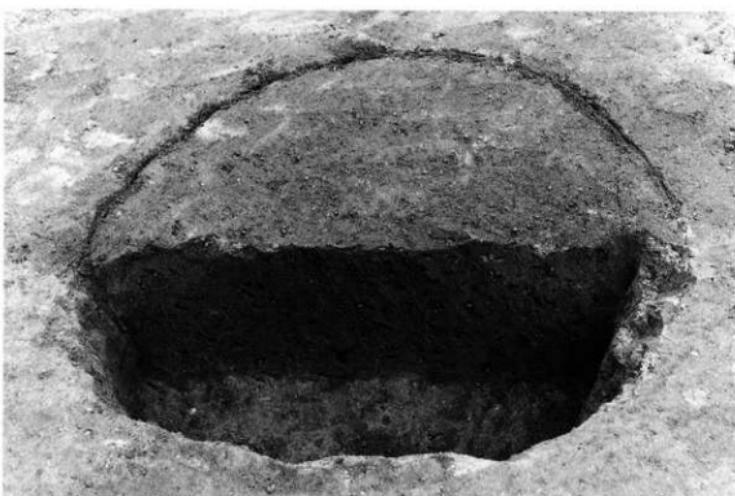


3号住居址遺物出土状況  
壺(2・3・4)

図版9



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑

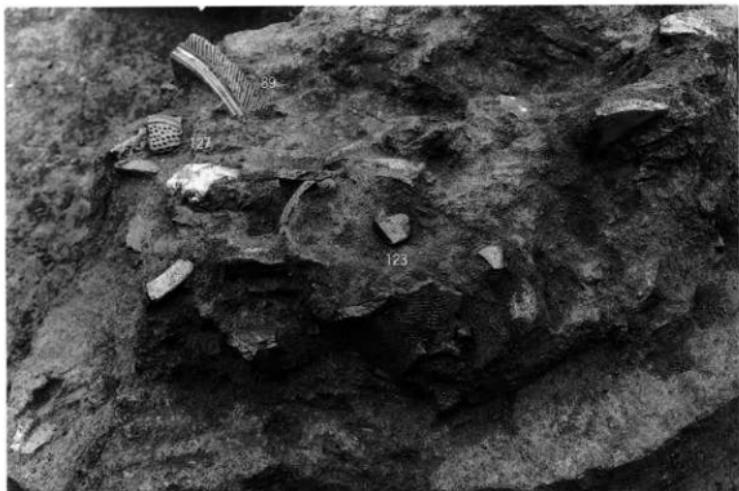
図版11



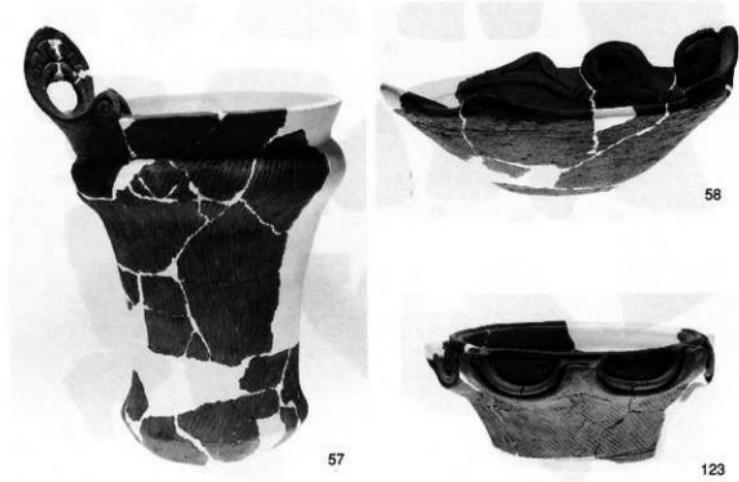
土器集中部 A



土器集中部 A

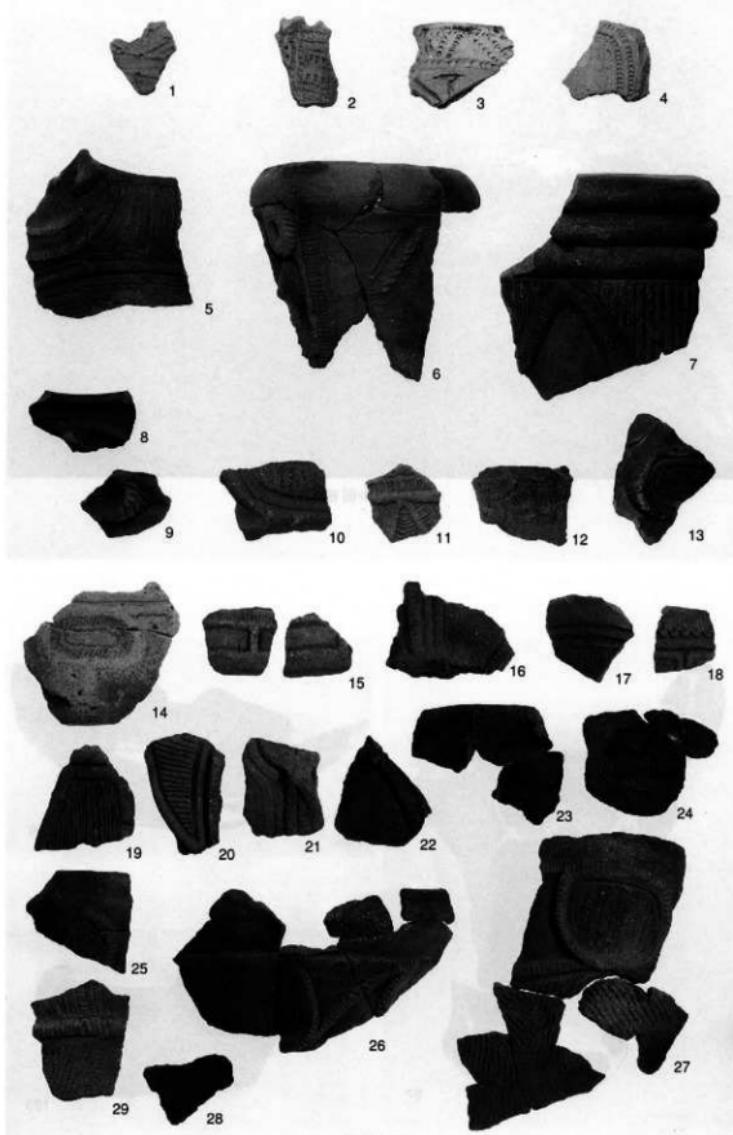


土器集中部 B



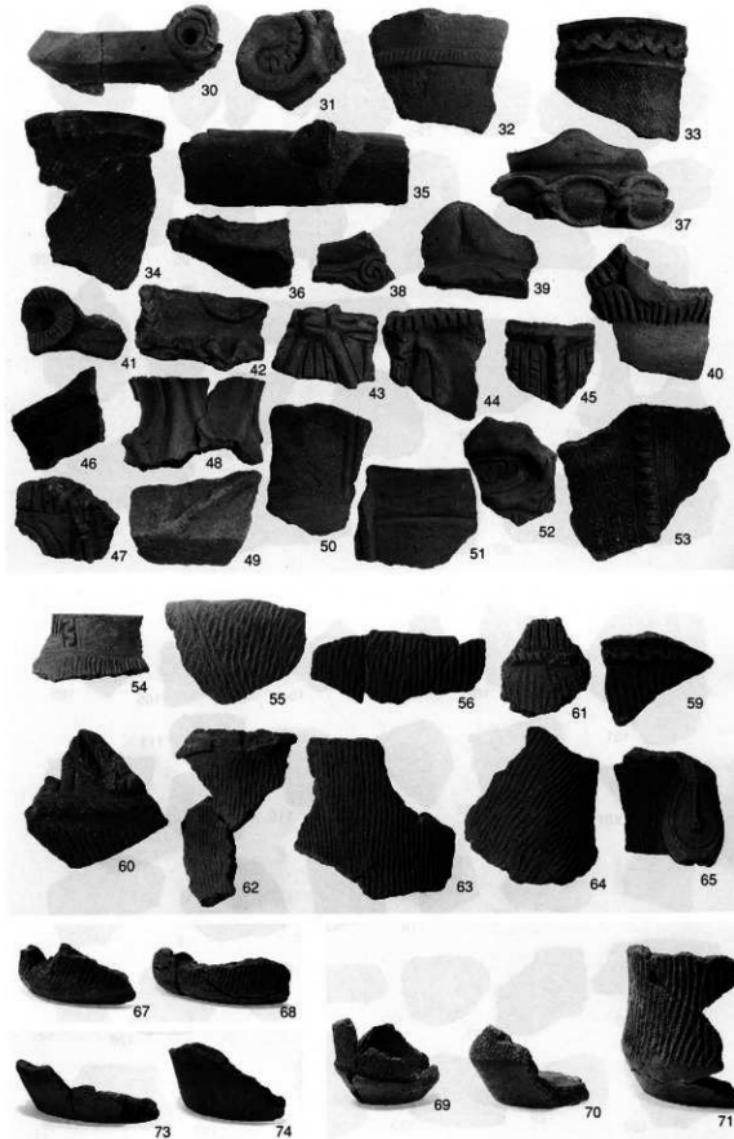
出土土器

図版13



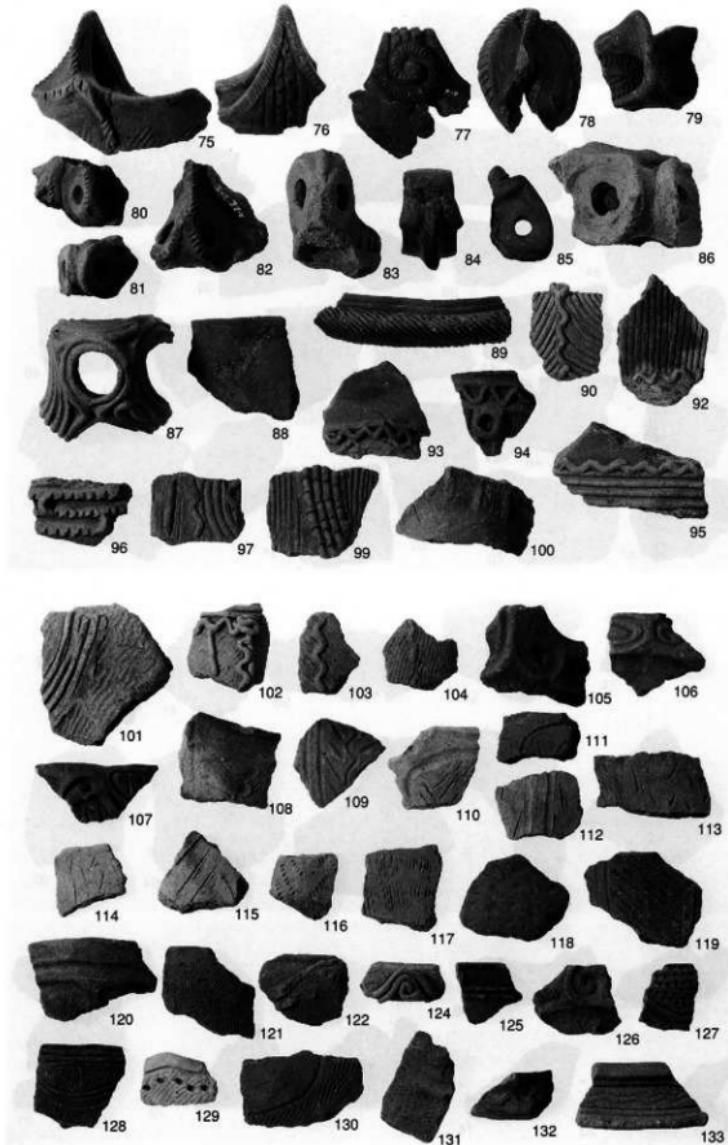
出土土器

図版14



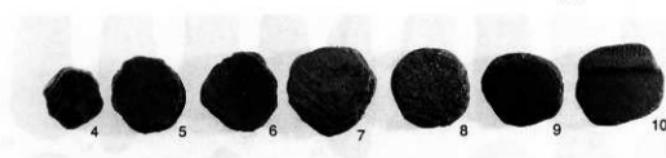
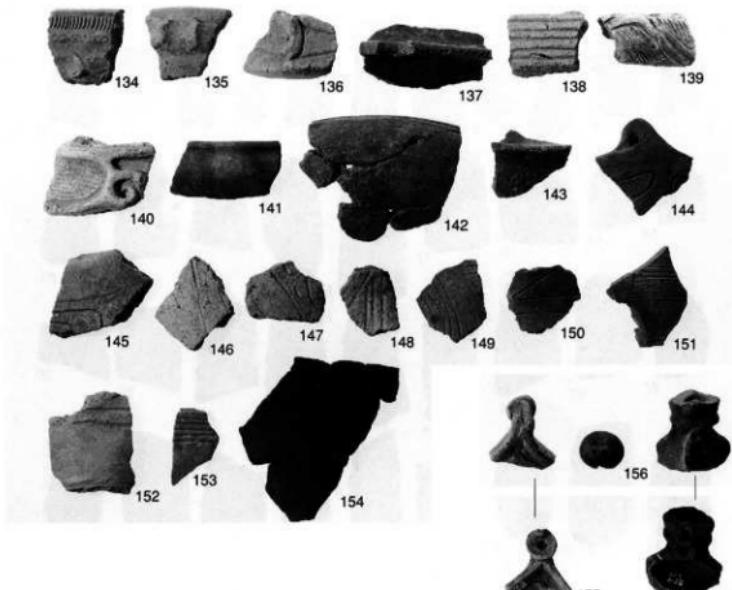
出土土器

図版15



出土土器

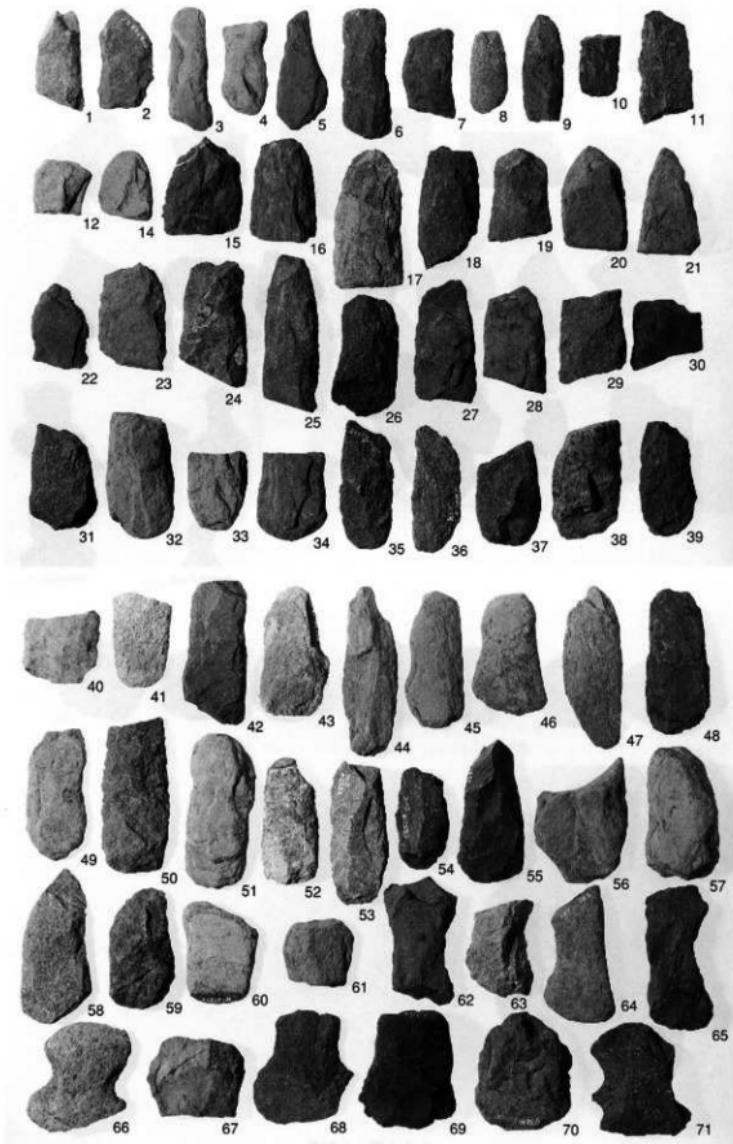
図版16



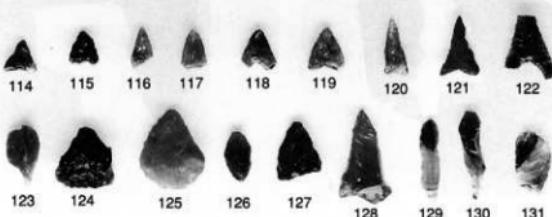
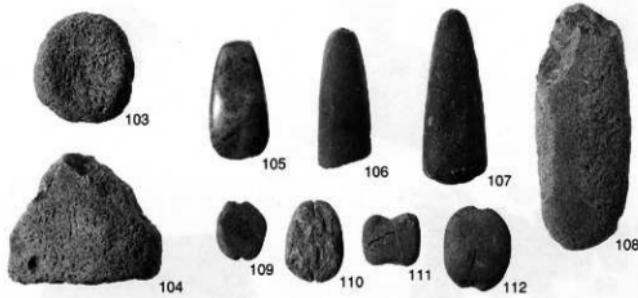
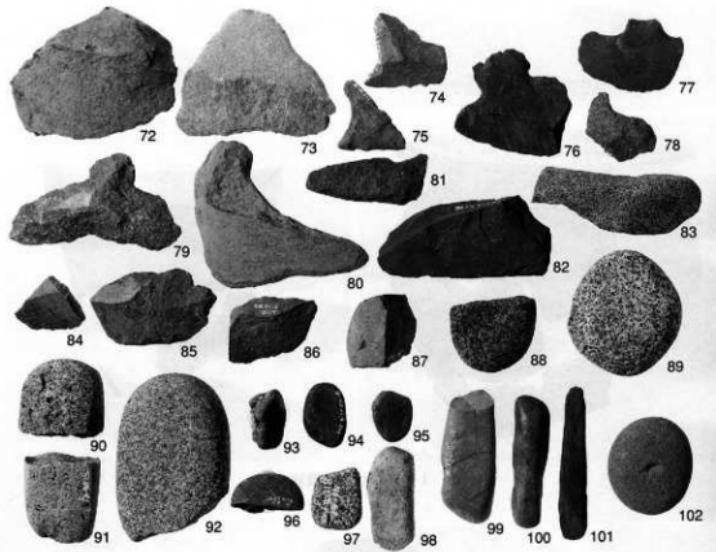
78

出土土器・土製品

図版17



出土土器



出土土器

図版19

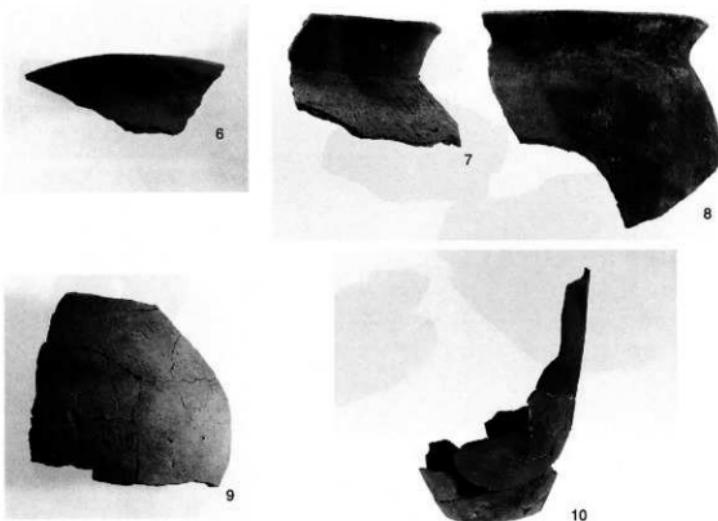


1号住居址出土遺物

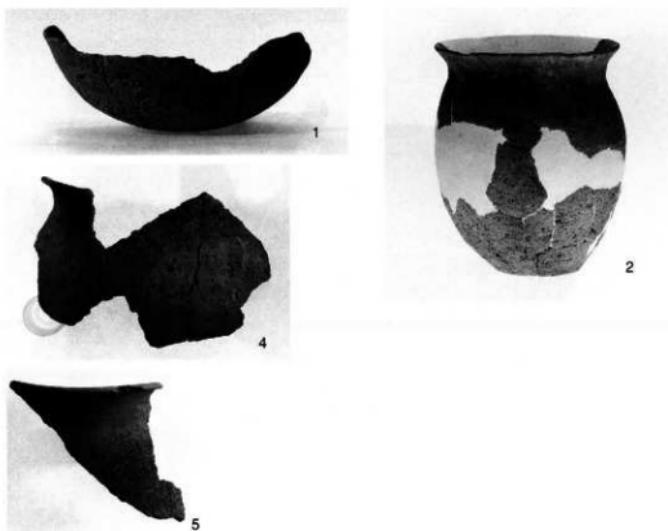


2号住居址出土遺物(1)

図版20



2号住居址出土遺物(2)



3号住居址出土遺物(1)

図版21



3号住居址出土遺物(2)

遺構外出土遺物



安藤隆氏所有の注口土器



調査風景



試掘風景



土層断面図作成状況



住居址検出状況



遺物取上げ状況

## 報告書概要

フリガナ	ウエノハラショウガッコウイセキ
書名	上野原小学校遺跡Ⅱ
副題	町立上野原小学校給食施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	上野原町埋蔵文化財調査報告書 第10集
著者名	小西直樹
発行者	上野原町教育委員会
編集機関	上野原町教育委員会
住所・電話	〒409-0112 山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1 電話0554-62-3111
印刷所	(株)サンニチ印刷
発行日	平成15年(2003)3月25日
上野原小学校遺跡	所在地 山梨県北都留郡上野原町上野原3489番地 地図名 1/25000上野原 北緯35°36'40" 東経139°06'56" 標高276m
概要	主な時代 繩文時代、古墳時代末～奈良時代 主な遺構 古墳時代末～奈良時代の堅穴住居址、土坑 主な遺物 繩文式土器・土製品・石器、土師器・須恵器・灰釉陶器 調査期間 平成8年(1996)4月22日～6月4日

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第10集

## 上野原小学校遺跡Ⅱ

平成15年(2003)3月25日発行  
編集・発行 上野原町教育委員会

